

2. 第3号ピット内出土種子の同定について

京都大学農学部 小林 央 往

第3号ピットから出土した種子(図版37-(1))は、下記のような9科12種であった。

イネ科

イネ *Oryza sativa* L. (ジャポニカ型), (栽培)

アケビ科

アケビ *Akebia quinata* (Houtt.) Decne. (野生)

ミツバアケビ *A. trifoliata* (Thunb.) Koidzumi (野生)

ウリ科

ウリ *Cucumis melo* L. (栽培)

グミ科

アキグミ *Elaeagnus umbellata* Thunb. (野生) (注: 正確にはアキグミと断定難)

ミソ科

エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britt var. *japonica* Hara (栽培)

ナス科

ナス *Solanum melongena* L. (栽培)

バラ科

ワリンドウ *Malus asiatica* Nakai ? (栽培)

ブドウ科

ヤマブドウ *Vitis Coignetiae* Pulliat (野生)

エビズル *V. ficifolia* Bunge (野生)

サンガクズル *V. flexuosa* Thunb. (野生)

タデ科

? *Polygonum*

いずれの種子も炭化は進んでいるものでもほぼ完全な形をとどめているが、胚乳などの中味は全く消失していた。

これらの種子の大部分をウリ、アケビまたはミツバアケビ、ブドウ属およびアキグミの種子が占めていた。まれに数粒のエゴマと雑草らしきタデ科の種子が見出された。このタデ科の種子を

除くと、いずれの種も晩夏から秋に熟する栽培種または身近な山野に自生している食用となる野生の種子である。また、夾雑物として、長さ5cm、幅7mm、厚さ4mmのスギの半炭化木片が1個、同炭化した木小片が数個、および直径6mmまでの軽石、さらにイエバエの蛹の抜ガラが見出された。

ウリは当時としては、シロウリ *Cucumis melo* var. *conomon* Makino とマクワウリ *C. melo* var. *makuwa* Makino がすでに栽培されていたと推定されるが、そのいずれかには断定できなかった。また、ウリの種子にはセリ科のものらしい炭化した葉片が付着しているものも認められた。

リンゴ属 *Malus* の炭化した種子 (図版37-(2)) も多数見出されたが、それらが中国原産で日本へは平安時代末期には入っていた栽培植物のワリング^(2,4)であるのか、または他の山野に自生するリンゴ属のものかは現時点では決定できなかった。

以上のことから、これらの種子が直径約1cm、深さ80cm程の土穴から多量に出た理由として次のようなことが考えられる。

- ① 出土種子は食用の栽培および野生種の種子を保存していたものと推定すると、アケビ属やブドウ属植物は身近なところに容易に見出せたことと推測できるので、これらの種子そのものに食用または薬用などの価値がない限り、わざわざ保存したのは不自然であると思われる。また、イエバエが発生していたと推定されるので、保存としては極めて状態の悪いものとなり、保存用に種子を集めたものとは考えにくい。
- ② これらの種子はすべて晩夏から秋に熟するものであることと、イエバエの発生が見られたことから、これらの種子は果実を食べたあとに、少なくともウジが発生する程度の果肉がついたままの残渣を貯めたものと推定される。

しかし、これらのいずれもが貯蔵目的としては不自然さが伴うと思われる。またスギ材製のクソベラと考えられる製品が同時に出土したということから、これらの植物の果実を食べ、種子をかみ砕かずに丸飲みにしたあとの排泄物であると考えるのが最も妥当でありそうである。

引用または参考文献

1. 笠原安夫 1976. 走査電子顕微鏡で見た雑草種子の造形. 養賢堂, pp. 130.
2. 菊池秋雄 1948. 果樹園芸学 上巻 果樹種類各論. 養賢堂, pp. 528.
3. 北村四郎・村田 源 1971. 原色日本植物図鑑木本編〔I〕. 保育社, pp. 401.
4. 北村四郎・村田 源 1979. 原色日本植物図鑑木本編〔II〕. 保育社, pp. 545.
5. 中川昌一ら 1986. 日本原産野生ブドウの栽培利用に関する研究. 昭和59年度科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書, pp. 49.

3. 出土遺物について

(1) 縄文時代の遺物

A・C区の礎石建物建立の際に、その基盤面を整地するため、北側崖（第二段丘面かその崖面かは不明）から盛土用に客土を行っている。この盛土整地層中から、縄文時代前期後葉の円筒下層d₁式、同中期末葉の中の平Ⅳ式・大木10式、同後期前葉の十腰内Ⅰ式土器などが出土した。

松原台地上には、前述したように松原小立遺跡が1カ所知られていただけで、しかもその時期は縄文時代後期末葉から晩期初頭と確認されてきた。今次の縄文時代遺物の検出によって、小立遺跡の範囲はさらに広がり、時期も縄文前期後葉、中期末葉、後期～晩期とより古い時代の遺跡の存在が明らかになった。

松原台地南端部の台地上では、眼下の下内川と男神・女神の両山およびその周囲の山稜からの自然の恵みを受けながら、縄文人が永々と営みを続けていたことが今次調査で確認された。今後は台地上の縄文時代遺跡の調査研究も進められなければならない。

(2) カワラケについて

第1～5次調査にわたり出土した素焼の土器である。一見、土師器の系統を引くものととらえられるが、当地方では矢立廃寺を除いては未検出の土器である。

大館地方の土師器文化の調査研究は、1970年代の発掘調査以後は停滞きみであるといつてよい。1970年代には、谷地中館遺跡^{※註1}（1971・72・76）、真館遺跡^{※註2}（1972）、池内遺跡^{※註3}（1972）、粕田遺跡^{※註4}（1973）、山館上ノ山遺跡^{※註5}（1975）、細越遺跡^{※註6}（1975）、塚ノ下遺跡^{※註7}（1977・78）等々の集落遺跡の発掘調査が小規模ながら行われ、古代の大館地方の解明に力が注がれた。

これらの調査結果を踏えてみると、いわゆるロクロ糸切りの坏（埴）を伴出する9世紀以降の文化が主体で、山館上ノ山遺跡からはその直前期と考えられる、石芯構築カマドを有する竪穴住居跡と底部木葉痕土師器が出土した。ひるがえって、谷地中遺跡・塚の下遺跡からは坏・皿・埴を伴わない、いわゆる砂底甕を主体とする土師器期集落が検出され、それは平安時代末期から鎌倉時代に位置づけられている。粕田遺跡、谷地中館遺跡からは須恵器とともに、珠洲の鉢や摺鉢が伴出している。

矢立廃寺出土の素焼土器は、以上の諸遺跡から出土した土師器とは、成形・形態・胎土・焼成等々において明らかに異なる面をもっている。

これまで土師器・土師質土器と呼んできたものであるが、ここでは古代土師器と区別するために「カワラケ」と呼ぶことにする。しかし、中世から現代まで継続する素焼土器の総称である「かわらけ」と同等に考えてよいものか、時代的、系統類別的（系類的と呼ぶ）にどのような位置

づけをなすべきか、この土器のもつ意義は矢立廃寺のもつ歴史的意義と深くかかわるだけに、「かわらけ」と区別してあえて片仮名の「カワラケ」をあてるが、それはこの土器の形式・型態を区分するいわば編年上の目的ではなく、北奥羽の内陸の一隅に忽然と出現した土器に与えた名称で、今後の研究が進む段階で、時代的・系類的に、凡東北的・凡東国的な歴史的地位が確立するまでの仮称であることをことわっておく。

カワラケは、ロクロと手づくねの二つの技法で成形されている。器形は小皿と皿が主体で、中に数は少ないが明瞭な台部を造り出し、器体が内湾ぎみに立ち上るやや深い碗形土器がみられる。それらを次のように分類する。

○小皿Ⅰ類（図版25）

ロクロ成形の糸切底の小皿。胎土は細砂粒（0.5mm以下）、粗砂粒（1.9～0.6mm）を混入するが、細砂粒混入の方が大多数を占める。色調は黄白色系・明褐色系・黒灰色系の三つの色系がみられる。焼成はすべてが良好で、褐色系と黒灰色系のものの中には硬く堅緻に焼かれたものも比較的多くみられる。

大きさは口径が7.8～8.8cm、底径が5.5～6.7cm、器高が1.2～2.2cmの範囲に集中し、中に1個体だけ口径9.8cm、底径7.1cm、器高が1.8cmの、他よりひとまわり大きめのものがある。

口唇断面は、丸みをもつもの、山形に立って頂稜を形づくるもの、外に開くものがみられる。

器体部は、底部からの立ち上りほぼ45度のものを中心に、それより内に急な立ち上りをするものと、外に大きく開くものがみられる。

器高はロクロ成形でありながら、同一個体でもそれぞれの部位で異なり、その差の大きいものは、例えば図版25-15では最大値が2.35cm、最小値が1.55cmと8mmもの差がみられる。ロクロ成形小皿の各個体における器高は一定していないといえる。

以上の諸要素から、小皿Ⅰ類は次の亜類に分類できる。

小皿Ⅰa類……口唇断面が丸く、ほぼ45度内外の立ち上りがあって、器壁全体が比較的厚ぼったく、全体的印象が丸みをもった柔い感じのもの。色調も黄白色系から明褐色系でやわらかい感じである。

小皿Ⅰb類……口唇断面が鋭角を成し頂稜をつくる。体部の立ち上りも45度からその内側にあってきつい。全体的印象は直線的でⅠa類に比べかたい感じがする。

小皿Ⅰc類……体部立ち上りが大きく外へ開く。器高はⅠa・Ⅰbと同様であるが、口径が大きくなるため小皿Ⅰ類の中では大ぶりである。

○小皿Ⅱ類（図版26）

手づくね成形の小皿。胎土は微砂粒（胎土自体に包含される微細粒）のもの、細砂粒混入のもの、粗砂粒混入のもの幅広いが、細砂粒混入のものが圧倒的である。色調は黄白色系のものが

主体を占める。底外面はへら調整，底内面はハケ調整を行い，その後に体部を横ナデ調整する整形工程が基本である。そのため横ナデ手法の最終工程である，体部から口縁へむかって右下から左上へ斜め上りのナデ痕が明瞭にみられる。焼成はおおむね良好である。

大きさは口径が8.6～10.3cm，器高が1.7～2.6cmと小皿Ⅰ類よりひとまわり大きい。

口唇断面は丸みをもつもの，回転（ロクロのような回転道具使用か手持ちによる回転かは不明）を利用したつまみ上げによる頂稜を形成するものがみられる。

器壁立ち上りは，底外面へら調整部分まではゆるやかで，体部横ナデ部分が立ち上り，その境に段がつくものもみられる。

手づくね土器において底部をどの範囲とするかは明確にできないが，第1～4表に示した数値は，へら調整部分の外周，すなわち体部横ナデ部との立ち上り変換点を目やすとした。この範囲を小皿Ⅱ類の正しく底部とみることができるとは確信はもてないが，一応の基準としたことをこたわっておく。

成形・胎土・焼成・色調から全体的印象は，丸みをもった柔かい感じを受ける。

小皿Ⅱa類……口唇断面が丸く，体部立ち上りが直上型ともいえるぐらい，他に比べ内側に強くみられる。そのため底外面へら調整との変換点には強い稜線（角）ができる。個体数はそれほど多くない。

小皿Ⅱb類……口唇断面は丸く，体部はゆるやかに立ち上る。横ナデによって底外面へら調整部との境に段がつく。もっとも普遍的な器形である。

小皿Ⅱc類……口唇がつまみあげにより頂稜をつくる。そのため口縁に蓋受け状のような低い稜がみられるものもある。

○皿Ⅰ類（図版27・28）

ロクロ成形の糸切底の皿。胎土は粗砂粒が主体で，中に精選された胎土（微砂粒を含む）のものもある。色調は黄白色，明褐色のものが主体で焼成は良好。

大きさは口径が13.2～14.0cm，底径7.4～8.8cm，器高3.7～4.7cmの範囲に集中する。

口唇断面は丸みをもつものと，角度をもって頂稜をつくるものがある。

体部は，底部から一旦ゆるやかに開きながら立ち上り，体部ほぼ中央部で内側にやや角度をもって立ち上る。そのため体部中央の傾斜変換点に稜がみられる。

個体数がそれほど多くないため，相互の細かな比較検討はできないが，現時点では，口唇が丸みをもつ皿Ⅰa類と，角度をもち頂稜をつくる皿Ⅰb類に分類できる。

○皿Ⅱ類（図版29・30）

手づくね成形の皿。胎土は精選されたものの割合が大きく，細砂粒混入のものが大多数で，器表面はスベスベしている。色調は黄白色系・黄褐色系が主体で，焼成はいずれも良好である。

大きさは口径が14.7~15.6cm, 器高が2.9~3.9cmと皿Ⅰ類よりひとまわり大ぶりである。整形手法・工程は小皿Ⅱ類と同様である。口唇は丸みをもつものが普遍的であるが, 小皿Ⅱc類と同様の口縁に蓋受け状のような低い稜がみられるものもある。

第1~4表の底部数値は, 小皿Ⅱ類同様に底部へラ調整と体部横ナデの境を目やすとしたため, 口径に対する底径の比がきわめて大きなものとなっている。

個体数が少ないため皿Ⅰ類同様に, 詳細な比較検討による分類はできないが, 現時点では口縁部の型態から, 丸みをもつ皿Ⅱa類と, 頂稜をつくる皿Ⅱb類に分類できる。

○堦 (図版28)

計測的には皿Ⅰ類とほぼ同等で, 成形・焼成・胎土・色調とも皿Ⅰ類に近似するが, 型態的, とくに底部において皿Ⅰ類とは顕著な違いを確認できる。すなわち, 底部に0.5~1.0cmほどの高さの台部を造り出しているものである。

底外面は平地でロクロ糸切り痕が明瞭である点は皿Ⅰ類と同じであるが, 底部立ち上りが0.5~1.0cmの高さで一旦直上し, それから外に大きく開き, ふたたび体部が立ち上るもので, その変換点の立ち上り角度が大きい。

台付皿と分類してもよいのかも知れないが, ここでは堦とし今後の類例を待ちたい。

以上の小皿Ⅰ・Ⅱ類, 皿Ⅰ・Ⅱ類, 堦をそれぞれ個別に, 口径と底径の相関をあらわしたのが第42図, 口径と器高の相関をあらわしたのが第43図である。

図をみて一目で, 小皿Ⅰ類, 小皿Ⅱ類, 皿Ⅰ類, 皿Ⅱ類が, それぞれ群でとらえられる。第42図の皿Ⅱ類が極端なバラツキを示すが, これは前述したように底径のとり方に問題があるからで, 第43図では見事にグルーピングされる。両図で比較しながら若干気づいたことを述べてみる。

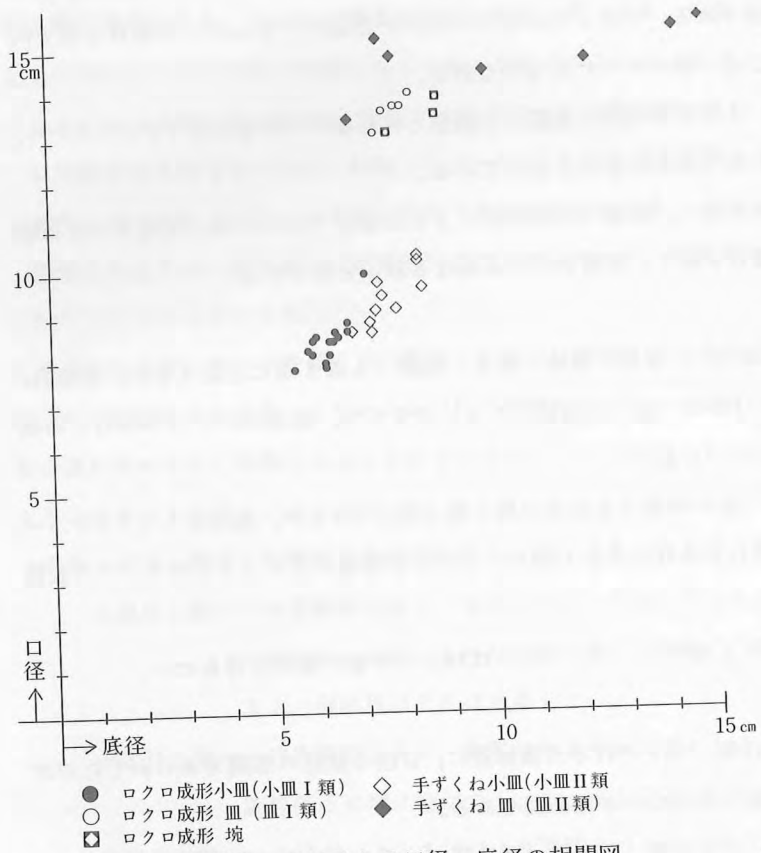
小皿Ⅰ類であるが, 1個だけ飛び抜けたものがある。個体数が少ないためなんとも言えないが, あるいはこの1個体を中心とするひとまわり大ぶりの小皿の群が存在する可能性もあろう。

小皿Ⅱ類では第43図の方がより明瞭であるが, ひとまわり大きい小皿が2個, 主グループから飛び抜けている。やはり小皿Ⅰ類同様やや大ぶりの小皿Ⅱ類の群が存在する可能性は高い。また主グループの中でも, 大小二つのグループに分かれる可能性もある。

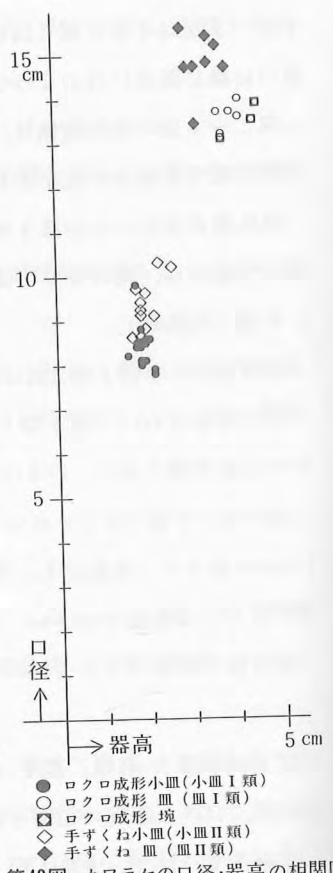
皿Ⅰ類はきわめて安定した群を形成している。よって皿Ⅰ類は口径13~14cm, 底径7.5~8.5cm, 器高が3.5~4.5cmの範囲に集約できる。

堦は皿Ⅰ類とほぼ同等の数値を示しながらも, 第42・43図とも皿Ⅰ類群の外縁に位置しているのを見ると, 型態的差異もあって皿Ⅰ類とは違う意識をもって製作された製品である可能性が高く, やはり皿類とは区別されるべきものなのではなかろうか。

皿Ⅱ類は主グループは安定しているものの, それらより小ぶりの皿が1個だけ抜け出ている。



第42図 カワラケの口径・底径の相関図



第43図 カワラケの口径・器高の相関図

皿II類もあるいはこの1個を中心とするやや小ぶりな群が存在する可能性は高い。

以上、矢立廃寺出土のカワラケは、成形技法上はロクロと手づくねの二種、器形上からは小皿・皿・碗の三種に分類できる。既述と重複するがあらためて分類すると、

- 小皿I類 (ロクロ成形小皿)
- 小皿II類 (手づくね成形小皿)
- 皿I類 (ロクロ成形皿)
- 皿II類 (手づくね成形皿)
- 碗類 (ロクロ成形碗)

の五つに分類できるようである。

これらカワラケの類例を求めると、岩手県平泉町を中心とする藤原氏関係諸遺跡から出土している「かわらけ」にたどりつく。^{※註8}平泉のかわらけも成形技法はロクロづくりと手づくねの二種、器形も大小の二種があり、

口径は「小型ロクロかわらけの平均値は8.6cmに対して、小型てづくねかわらけのそれは9.4cmと小型同士でもてづくねかわらけの方が大きい。それに比べて大型のロクロかわらけと大型のてづくねかわらけとは同じ大きさである。」

器高と口径の相対関係は「ロクロづくりのかわらけは、大型は相対的器高が高く、小型はそれが低い。てづくねかわらけは、相対的器高は大型・小型とも変化はそれほどみられない。」

底径と口径の相対関係は「てづくねのかわらけは底径が計測できないことから、ロクロづくりのかわらけの法量のみである。Aグラフは相対的なかわらけの壁（底部から口縁への立ち上がり）の角度の度合いをあらわしており、大型のロクロづくりかわらけは器壁（立ち上がり）が角度をもち、底部が口縁部に対して小さくすばまる。それに対して小型ロクロづくりのかわらけは断面が逆台形を呈する。

^{※註9}
とされる。

基本的なところでは矢立廃寺出土のカワラケと同じであるが、皿の大きさがロクロ・手づくねとも同じであるのとは大きな違いがみられる。

平泉では共伴陶磁器から12世紀のものにとらえている。歴史的背景からいってもそれは妥当であろう。

矢立廃寺出土のカワラケは平泉のかわらけに比定できよう。よって上限を12世紀に求めることには問題がないと考える。しかし、前述したように平安時代後期から鎌倉期に位置づけられている集落遺跡出土の土師器とは大いに異なる。これが時間差（編年上）に起因するものなのか、それとも同時代に存在しながら矢立廃寺が独特の土器を使用する特殊な機能・性格をもった遺跡なのか、という大きな問題があるといえよう。

※註1：奥山 潤・板橋範芳『谷地中館 中野円墳状遺構 発掘調査報告書』1973、大館市史編さん委員会

畠山憲司『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』1978、比内町教育委員会

※註2：奥山 潤・富樫泰時『真館緊急調査報告書』1973、比内町教育委員会

※註3：『池内遺跡発掘調査報告書』1973、秋田県立大館桂高校社会部

※註4：奥山 潤・板橋範芳『柏田遺跡発掘調査報告書』1974、大館市教育委員会

※註5：『大館市史』第一巻、板橋範芳「第三章 古代・中世の文化」1979

※註6：板橋範芳『細越遺跡緊急発掘調査概報』1976、比内町教育委員会

※註7：富樫泰時ほか『塚の下遺跡発掘調査報告書』1979、秋田県教育委員会

※註8：本沢慎輔『柳の御所跡発掘調査報告書—第11・12次発掘調査概報—』岩手県平泉町文化財調査報告書 第1集、1983、平泉町教育委員会

なお、平泉出土かわらけについては1986年11月6・7日の両日、板橋が毛越寺遺水跡調査中

の本沢慎輔氏を訪ねいろいろ御教示いただいた。また、岩手県立博物館を訪ね、岩手県内出土のかわらけ、陶磁器を熊谷常正氏のお世話で拝見させていただいた。

※註9：註8『柳之御所跡発掘調査報告書』

(3) 陶磁器について

掘り込み遺構焼土上出土の白磁玉縁碗口縁（第24図）と焼土遺構直上埋積土中出土の白磁碗底部、およびB建物西側溝中出土の白磁碗底部は（図版31-1・2・3）、ともに同類の白磁玉縁口縁碗破片で、12世紀の中国南方（福建省と考えられる）製品である。

焼土上から白磁玉縁碗口縁とともに出土した皿の口縁小破片も、同様に12世紀ごろの製品であろうと考えられる（図版31-4）。

C区盛土整地層最上位層から出土した四耳壺も色調は複雑であるが、やはり12世紀の中国南方産の白磁四耳壺であろう。

C建物北溝中出土の須恵器系陶器鉢口縁破片（第17図）と第3次調査bトレンチ出土の須恵器系陶器鉢口縁破片は、いずれも珠洲陶器編年の片口鉢Ⅰ期またはⅡ期に比定でき、12世紀後半から13世紀初頭の製品であろう。

C区出土整地層中から出土した多量の須恵器系陶器甕または大壺の破片は、胎土から須恵器製作の系統を引く地元（北奥羽地方）製品であろう。口頸部に大きな特徴があり、珠洲陶器編年で比較すると、明瞭な頸部をもち口縁が外へ大きくそり返る形態は甕Ⅰ類に比定でき、これもまた12世紀から13世紀の製品とみてよいだろう。内面アテ痕には珠洲陶器のメルクマールである円形無文のアテ痕がみられるものとアテ痕のみられないものがほぼ半々である。

以上、出土陶磁器類は12世紀の製品が主体で、それは平泉のかわらけと比定できるカワラケとも合致する。出土陶磁器、カワラケからみるかぎり、12世紀から13世紀初頭の年代と推察できよう。

(4) 刀子状木製品について

第3号ピット中より多量に出土した杉材の木製品で、長さ20cm前後、幅1cm前後、厚さ0.5cm前後のものを基調とする。

このような木製品の出土類例は管見では残念ながら知らない。しかし、出土状況から「^{ちゅうぎ}箸木」
「^{せっちんべら}廁箒」 「トウカキ棒」などと呼ばれる用便後の清掃具、いわゆるクソペラであろうと推察する。

『^{※註1}正法眼蔵』には、^{かわや}東司での作法が事細かに述べられ、

肩屎退後、すべからく使箒すべし、又かみをもちるる法あり、故紙をもちるるべからず、字をかきたらん紙もちるるべからず、浄箒・触箒わきまふべし、箒はながさ八寸につくりて

三角なり、ふとさは手拇指大なり、漆にてぬれるもあり、未漆なるもあり、触は籌斗になげおき浄はもとより籌架にあり、籌架は槽のまへの板頭のほりにおけりと籌木について述べている。『^{※註2}厠史話』にもこのことが詳しく述べられている。

『江戸かわや図絵』には「せっちんべら」について詳細な記述があり、

わが国の庶民の間では古くから〈篋木〉(くそべら)とよばれた清掃具が行われていた。木・竹を短冊形に削ったもので、〈形付篋〉(片搗、麦を水に浸してすく扣くこと。又、その扣く杵についた麦を篋でこくもの)と形状がよく似ていて、次の句、

○形付や江戸でも篋で尿をふき 柳の糸競35才

を見ると、市内の人はそんなことはないが、江戸の在郷では、この習慣は明治のはじめ頃まで行われていたものではあるまいか。

中 略

糞べら・麦藁等による習慣は、ごく近くまで東北の山村では行われたともきくとある。

『^{※註4}十和田の四季』には、次のように

チュウギはトウカキ棒ともいう。用便後に使用するもの。今では古新聞やチリ紙を使うようになったが、以前は殆んどの家がこれであった。長さ20センチ、幅5センチの木片で、箱を二つ上下におき、上の方の箱には新しいもの、下の方へは使用済みのものを入れておく。古いのは洗ってまた使う家もあるが普通は焼きすてる。

1回に2・3本使うからかなり多く要るわけで、以前の子どもたちはチュウギ作りをよくやらされた。細くうすく割って約200本を一束にし箱に入れておいても一週間ぐらいでなくなってしまう。

と、記され、便所内の籌木箱と箱に入った籌木の写真を載せている。

本製品はクソベラであり、第3号ピットは便所の溜穴、ピット内出土の種子は排便に混った食滓で、第3号ピットは掘り込み遺構ないしはその床面に検出された掘立柱で架設される建物内に付属する施設であったと推察する。

※註1：増谷文雄『現代語訳 正法眼蔵 第一巻』1973、角川書店

※註2：李家正文『厠史話』1949、六興出版社

※註3：花咲一男『江戸かわや図絵』1978、大平書屋

※註4：生出 匡『アサヒ写真ブック1 十和田の四季』1954、朝日新聞社

※この項の執筆にあたり、秋田県立大館鳳鳴高校 日景 健教頭より、御指導御助力を得た。記して感謝の意を表する。

(5) 磨石について

この遺物については、その性格を知る手がかりがまったくない、というのが実情である。上・下に平坦面をもち、側面全体を球体に磨いている点からして、五輪塔の水輪に相当するものではと考えられるが、刻字などは一切みられず、他の地・火・風・空輪に相当するものも検出されなかった。

4. 遺構と遺物の関係について

第1～5次調査において検出された遺構と遺物の関係についてみてみよう。

第1次調査において礎石建物（C・D・E建物）検出の際、小皿Ⅰ類と皿Ⅱ類が出土している。^{※註1}

第2次調査においてAⅡ礎石建物に伴う雨落溝のうち、A溝中より小皿Ⅰ類が、C溝中より皿Ⅰ類の底部が出土し、建物基盤面から小皿Ⅰ類・皿Ⅰ類が、AⅠ掘り方掘立柱建物の掘り方内埋積土中より小皿Ⅰ類が出土している。^{※註2}

第3～5次調査では掘り込み遺構床面の焼土上と貼床上から小皿Ⅰ類、小皿Ⅱ類、皿Ⅰ類、皿Ⅱ類、埴類が出土し、掘り込み遺構埋積土中からも同様の出土があり、C建物基盤面からも少数ながらカワラケ破片が出土している。

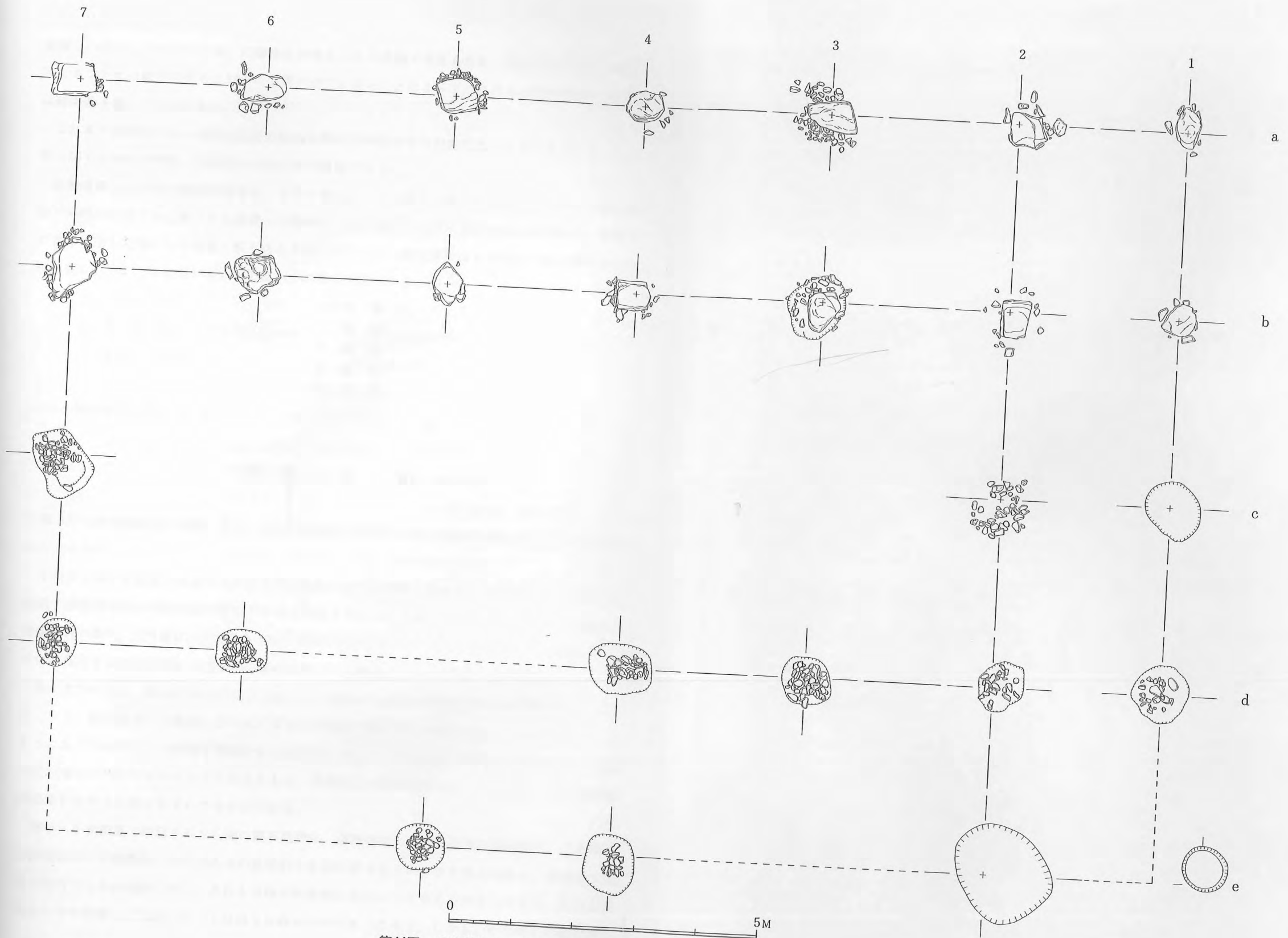
遺構の切り合い関係から、

掘り込み遺構→掘り込み埋積土（人工的埋め戻し）→C建物（礎石建物）

の構築順序が確認できる。これらの時間差にかかわらずカワラケが各構築期にみられることは、その時間（期）差が大きくかけはなれるものでないと考えられる。すなわち明確に生活跡に密着して検出された掘り込み遺構内焼土、貼床遺構は、遺構面上出土のカワラケや白磁玉縁口縁碗などから、平泉藤原氏関係諸遺跡との対比により、12世紀後半から13世紀初頭にかけての年代が与えられ、それに後続する埋積土（埋積土の土木工事はC建物建立に先立つ盛土整地工事であって、C建物とは近接な関係にある）・C建物の構築も、その後のそれほど時間をおかない時期のことと考えられる。

また、同じく盛土整地層から検出された須恵器系陶器片、白磁皿耳壺も12世紀から13世紀初頭の製品である。これらの遺物は盛土を客土する際に客土中に混って移動されたものか、客土作業中に発見されまとめて盛土整地層中に廃棄されたものであろう。出土状況からは後者の方が考えられる。そうであるとすると、須恵器系陶器の甕あるいは大壺と白磁皿耳壺および磨石などは、北側崖上にあったものと考えられ、そこに埋設されていた遺構、例えば納骨器、納経器のようなものであった可能性が高い。

以上のことから、12世紀から13世紀初頭の製品を客土の際にとり寄せていることから、客土作業は13世紀以降の仕事であり、しかも、12世紀から13世紀初頭に上限をもつカワラケが各時期の

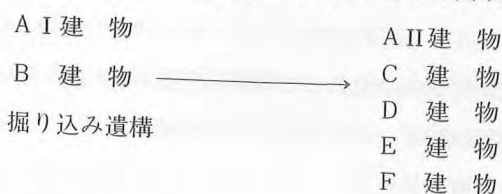


第44図 C建物礎石・根石・掘り方実測図

遺構から出土していることは、C建物は13世紀ごろの建物と考えられる。今後のカワラケの研究、特にカワラケの使用年代およびその下限の研究が進むことによって、これら一連の遺構の年代幅は確実性を増してくるだろう。

これまでの調査では、13世紀以降の陶磁器類は19世紀のものが数片出土しているだけで、本遺跡に関する伝承の時代、14世紀のものは未だ確認できない。

建物遺構とその他の遺構の関連は、A区の場合、A I（掘り方掘立柱建物）→A II（礎石建物）の順、C区では、掘り込み遺構→建物C（礎石建物）の順が切り合いから明瞭で、前述したように出土遺物からB建物=掘り込み遺構が考えられ、礎石建物はその礎石下部の構築法から同時期に存在した可能性がきわめて高い。すなわち図示すると、



という構築順序が考えられる。

VIII ま と め

第3～5次発掘調査の結果、第1・2次発掘調査の想定とは異なる推察が導き出されることとなった。

すなわち第1次調査で東面する桁行7間、梁間6間の仏殿跡と想定された建物は、今次調査で、南面する桁行6間、梁間4間の建物であると確認できた（C建物、第44図）。また、第2次調査で想定された総門、三門跡は、今次調査で桁行6間、梁間3間の掘り方掘立柱建物（A I建物）と、それに後続する桁行5間、梁間4間の礎石建物（A II建物）であると考えられるにいたった。

出土遺物からは、礎石建물에 先行する掘り込み遺構が12世紀の構築物である可能性がきわめて高くなり、礎石建物（C建物）はそれとそれほど時間を隔てない時期のものであると考えられるようになってきた。この問題を理解するためには、カワラケの年代幅、特にその使用された下限年代の確立が大きくかかわってくるとともに、未調査区の発掘調査を行って、より一層の調査研究深度を高める必要が生まれてきたといえる。

第1～5次調査で確認された五棟の礎石建物は、遺跡地内における最期の構築物で、これ以後、当該地において構築物、いわば人々の直接的な生活は営まれなかったと考えられる。当地方では稀な礎石づくりの建物であり、それも五棟が同時期に存在したと考えられることから、その上屋構造とその景観は、当時にとっては目を見張るものであったろう。しかし、それほどの建造物で

ありながら、この遺跡に関する史資料、伝承は皆無に等しい状況である。

秋田市の松原補陀寺の前身であったという伝承、菅江真澄が当時見聞きした伝承は、そのような意味では重要であり消し去ることはできない。その伝承によれば当遺跡の年代は14世紀前半期のこととなる。しかし、その時代の遺物は一片も検出できなかった。前述したようにカワラケの下限年代、そして陶磁器の伝播、相伝という問題も大きくかかわってくるであろう。

伝えられる寺院跡としての性格を示す遺物の出土もなかった。しかし、前述したようにカワラケは当遺跡だけにみられる遺物であり、その点と建物構築技法を考えると、当地方におけるきわめて特色ある性格をもった建造物であると見做すことができ、当時の社会情勢下での寺院のあり方からかけはなれたものでないことも確かである。このことは、今後の古代・中世の集落一般構築物、官衙構築物、そして大館地方周辺の寺院構築物のより一層の研究の進展と対比研究が進められるべきであろう。同時に盛土整地層中から出土した須恵器系甕あるいは大壺と白磁四耳壺は、礎石建物以前の宗教関係遺物、例えば納骨、納経壺としての可能性の高いことは前述したとうりであるし、磨石が小さな五輪塔の水輪と見做すことができるとすればなおのこと、当該地区は宗教的色彩の濃いところであったといえよう。

第5次調査で厠と考えられるピット遺構とクソベラと考えられる木製品の検出はトピックであったし、同時にピット内から出土した種子は、特に栽培種のもが多量であっただけに、当地方の古代・中世の畑作農耕に関する重要な手がかりを与えてくれたことになる。それはまた畑作農耕と厠の存在、いわば畑作肥料としての糞溜め、肥溜めという畑作農耕技法にまで発展する問題をはらみ、かつ「リング」種の発見は、現在の段階で考古学的に確認されたリング栽培の最古の例となるものではなからうか。この点に関しては識者からの類例の御教授、御助言をおおぎたい。

以上、寺院跡とする積極的根拠は稀薄ながらも、当地方における稀な建造物であること、出土遺物が稀な存在であることから、寺院跡である可能性は高いといえよう。しかし、その年代は伝えられてきた年代から1世紀から1.5世紀ほど遡る可能性が高くなってきた。今後の未調査区の調査研究が必要である。

末文ながら、本調査の実施にあたって関係諸機関、関係諸氏から数々の御指導、御教示をうけたこと、地元松原集落の皆様から多大の御協力を得たことを明記して感謝の意を表したい。

〔付 載〕

矢立廃寺跡発掘調査成果の検討

岩手県立盛岡工業高等学校情報技術科

国 生 尚

I はじめに

矢立廃寺跡は昭和39年の発掘調査によって、地方禅宗寺院の数少ない発掘調査例として広く知られるようになった。

その後、第2次（昭和48年）、第3次（昭和59年）～第5次（昭和61年）の発掘調査が実施されているが、これらの調査成果を総合して見て、矢立廃寺の禅宗寺院説に再検討の必要なことを感じた。

本稿は、矢立廃寺について再検討を試みるものであるが、調査成果を充分理解していない可能性があることに加えて、発掘調査に未調査部分があるなどの事情があつて、要はづれの考察をしている可能性が心配されるのであるが、少なくとも、従来の矢立廃寺に対する禅宗寺院説に再検討が必要であることについては誤りないと信ずる。

矢立廃寺の調査、研究に新たな視点を加えることについて諸賢のご教示を乞うものであります。

II 矢立廃寺の調査と研究

矢立廃寺に対するこれまでの調査と研究について、関係文献や資料によって概観してみたいと思う。

1. 現況調査—補陀寺旧跡説—

補陀寺旧跡説 〈文献1〉〈文献2〉〈文献3〉〈文献4〉〈文献5〉は菅江真澄の記録である。この記録によって、遺跡の存在は古くから知られていたこと、さらに、現在の秋田市松原の亀像山補陀寺は、ここから移転したと伝えられていたこと、などを知ることができる。詳細な考証は〈文献14〉につきるであろう。

菅江真澄とはほぼ同じころ、大館市出身の二階堂道形（1767（明和4年）～1829（文政12年））の〈文献6〉の存在が知られているが、〈文献8〉などに散見されるものの詳細は不明である。菅江真澄との関係など気になるところであるが、地元では古くから注目され、研究されていたことが

わかる。

現況調査 〈文献8〉〈文献9〉〈文献12〉には次のような現況調査が記録されている。

- (1)明治25年頃 S B01発掘, 出土品なし
- (2)昭和6年 S B01礎石実測
- (3)昭和7年4月 S B02発見, 実測
- (4)昭和7年5月 S B03発見, 実測 S X01, S X02発見
- (5)昭和39年 S X01, S X02実測
- (6) ? S X03発掘

文献によって礎石間の寸法にちがいが見られたり、〈図面1〉のような実測図が存在するところを見ると、これ以外にも確認のための調査がおこなわれていたことが考えられる。

2. 第1次発掘調査—禅宗寺院跡説—

昭和39年、本格的な発掘調査が実施された。この調査で3棟の礎石建物が検出され、東西方向の中軸線上に、東から7間×6間、5間×3間、3間×2間の規模で、各々仏殿、法堂、方丈と推定され、さらに、仏殿の東方には総門か三門と思われる礎石も発見された。このような伽藍配置から禅宗寺院跡であると考えられるに至った。調査成果は〈文献11〉で正式に発表され、同じ内容で〈文献12〉〈文献13〉〈文献15〉等の諸書に見られるようになる。地方における禅宗寺院跡の発掘調査は数の上からもほとんど例がないこともあって注目されたのであるが、調査の継続を前提にしているためか調査成果の発表は簡単なものであった。

調査成果に対する単純な疑問として、仏殿が比較的大規模であるのに対して方丈が小規模すぎるなど、建物の規模に不釣合があること、建物の間隔が接近しすぎることなどを感じた。

3. 第2次発掘調査—市史編纂—

市史編纂事業の一環として第2次発掘調査が昭和48年に実施された。調査地点は前回第1次調査で門の存在が予想された地区である。ここで門を検出して主要堂舎の配置を確認することが目的であった。

報告書によると、総門(5間×3間礎石建物)、これに重複して総門(5間×2間掘立柱建物)があって、総門の西に三門(2間×2間掘立柱建物)がある。三門の北側と南側には各々1間×1間の掘立柱建物が附属している。1次調査で門の一部と思われていた礎石には関連する遺構が検出されなかった。

この調査で注目されるのは、従来礎石建物だけが知られていたのに対して掘立柱建物が存在し、重複が見られることである。又、土器についても、かわらけが主体であるらしく、遺跡に対する従来の年代観に多少疑問の余地が出て来た。などである。

今回検出された遺構は、全体を発掘していないこともあるが、門を復原するには資料不足で、

やや特異な例とならざるを得ないような気がする。〈文献16〉〈文献17〉

4. 第3～5次発掘調査—史跡公園整備—

矢立廃寺跡を史跡公園として整備するに先きだち補足のための発掘調査を3ヶ年計画で実施した。

第3次発掘調査(昭和59年) 第2次発掘調査で検出した門跡の全体を再調査することと、仏殿の南東地区の調査が各々おこなわれた。

第2次発掘調査において門跡と考えた建物3棟は、各々、5間×4間の礎石建物と6間×3間の掘立柱建物に訂正された。第1次発掘調査で門の一部と考えられた礎石は以前として関連遺構が見られない。結局、この地区で門は確認できないことになった。

仏殿南東地区の試掘では「落ち込み」としているが、整地層を検出している。〈文献18〉

第4次発掘調査(昭和60年) 前回第3次発掘調査において調査した仏殿南東地区の全体調査と、この南東地区と仏殿との関係、さらに寺跡北側台地上の円丘状遺構が調査の対象となった。

仏殿については、主として北側半分を発掘し、第1次発掘調査において9間×6間と考えられていた礎石建物は6間×4間の可能性があること。北、東、西側に雨落溝が検出されたことなど重要な発見があった。

仏殿南東地区は、整地地業と、長方形の溝をめぐらした基壇状の遺構を検出した。

基壇状の遺構については掘立柱建物跡と報告されている。杭列?の性格など不明な点が少くない。

円丘状遺構は人為的な痕跡は認められないことから自然の形成によるものと判断している。〈文献19〉

第5次発掘調査(昭和61年) 第4次発掘調査によって仏殿跡が6間×4間の可能性が強いことから、確認のため仏殿の南側半分と、さらに南に拡張して調査がおこなわれた。

南側雨落溝は面では検出されていないが、2ヶ所の断面で見られるので、仏殿を6間×4間とすることは確定したと思われる。

関係文献

- 文献 1 1803(享和3年) 菅江真澄 贄能辞賀樂美
" 2 1811(文化8年) 菅江真澄 勝手の雄弓
" 3 1814(文化11年) 菅江真澄 花のいではち
" 4 1814(文化11年) 菅江真澄 勝地臨毫
" 5 1827(文政10年) 菅江真澄 月出羽道
" 6 ? 二階道道形 竹隠随筆?
" 7 1932(昭和7年) 笹島定治 藤原藤房卿

- 文献 8 1932 (昭和7年) 滝儀太郎 藤原藤房卿の隠遁の地として知らるる松原補陀寺の卑見
 // 9 1932? 滝儀太郎 寺跡に就いて
 // 10 1955 (昭和30年) (文7)(文8)(文9)の合本再版 矢立村教育委員会
 // 11 1964 奈良修介 板橋 源 昭和39年度矢立廃寺跡発掘調査略報
 // 12 1964 田山 久編 「矢立廃寺」松原補陀寺跡研究の手引
 // 13 1965 奈良修介 板橋 源 矢立廃寺跡発掘調査概報 出羽路26
 // 14 1965 板橋 源 羽後禅刹矢立廃寺年代考 出羽路27
 // 15 1967 奈良修介 豊島 昂 秋田県の考古学 吉川弘文館
 // 16 1973 奥山 潤 板橋範芳 斉藤隆悦 矢立廃寺発掘調査報告書 大館市史編纂委員会
 // 17 1979 大館市史第1巻 大館市
 // 18 1984 昭和59年度矢立廃寺発掘調査概報 大館市教育委員会
 // 19 1985- 昭和60年度矢立廃寺発掘調査概報 大館市教育委員会

資料 (第1次発掘調査関係)

- 図面 1 現況並実地測量図
 図面 2 A地区礎石実測図 (1:50)
 図面 3 B地区礎石実測図 (1:50)
 図面 4 C地区礎石実測図 (1:60)
 図面 5 秋田県史跡矢立廃寺松原補陀寺跡第1次発掘調査見取図
 図面 6 矢立廃寺跡付近地形図 (1:500)

写真 1 大館市教育委員会保管一式

写真 2 田山 久氏保管一式

III 発掘調査成果の再検討

1. 整地層

第2～5次発掘調査において整地層の調査がおこなわれている。報告書から要点をあげると次のようになる。

- (1)整地層は建物の検出される面の南側に見られ、整地は1回だけと思われる。
- (2)整地層最下層から多量の土器が出土する。
- (3)SB02礎石建物は整地後に建てられている。

以上のことから、まづ整地層最下層から出土する土器にともなう遺構が存在することが考えられること。次に、整地後にS B02礎石建物のような遺構が存在することなど、整地前の遺構と整地後の遺構の区別が可能のように思われる。

しかし、現状ではわずかに、S B02礎石建物が整地後の遺構であることが確認できるだけで、他の遺構については区別できない。掘立柱建物などが整地前の遺構となる可能性もあるが確証がない。

整地前と整地後の年代については、整地層最下層から出土するかわらけ等の土器と、整地後の遺構であることが確実なS B02建物に伴うかわらけの土器とで、まったく差異のないことから、整地前と整地後の時間差はあるものの土器等の遺物に表われるほどの時間差はないと考えられている。

2. 出土遺物

矢立廃寺出土の遺物について、報告書から要点をまとめると次のようになる。

第1次発掘調査 出土遺物については、「土師質の浅い坏がA地区より数ヶ分、C地区より2片出土した。食器及び燈火用の坏と思われる。」とだけ記してある。一方〈文献15〉においては土器の実測図を示して、毛越寺、無量光院、中尊寺など平泉の諸寺院跡から出土する土師器と類似することを指摘している。

第2次発掘調査 土師器、須恵器、陶器、縄文土器が出土している。土師器は皿形で底部は糸切底のものと切り離し技法不明のものがあるとしている。又、考察において土師器は「かわらけ」であることと、願成就院跡出土のかわらけと酷似していることを指摘している。

第3次発掘調査 II区試掘坑c、c'トレンチにおいて検出した掘り込みの底面上の木炭や灰の層から土師質土器のみ出土した。土師質土器は皿形と碗形があり、皿形は小皿（燈明皿）と皿がある。小皿にはロクロ成形で糸切底のものと手づくね成形のものがある。皿形は手づくね成形のもので、碗形についてはロクロ成形、糸切底である。

第4次発掘調査 仏殿に伴う遺物として、2C根石から須恵器小片、北溝のdとe柱間北側から珠洲系鉢破片がある。

落ち込み底面の焼土面や貼床面から土師質小皿と皿が多数、珠洲系陶器片、施釉陶器片が出土している。

土師質土器については次のような分類をしている。小皿Ⅰ類：ロクロ成形、糸切底、小皿Ⅱ類：手づくね成形 皿Ⅰ類：ロクロ成形、糸切底 皿Ⅱ類：手づくね成形 碗類。

陶器類については、珠洲系陶器片が12世紀末～13世紀初頭、施釉陶器片が中世初頭から14世紀末などの年代に比定できると報告している。

これら矢立廃寺出土の遺物でまづ注目したいのは「かわらけ」である。土師質の浅い坏、皿形

土師器、土師質土器などと呼ばれているものがかわらけである。これらのかかわらけを平泉より出土のかかわらけと直接、現物で比較を試みているが、特に指摘できる差異は見出し得なかった。平泉出土のかかわらけに酷似していることをもって、平泉と同年代とするならば、矢立廃寺は12世紀ということになる。

一方、施釉陶器類についても改めて詳細な観察と検討をした結果、いずれも12世紀のものと同断されている。

3. 検出遺構

遺構の検討をするにあたり、遺構に一連の番号を付して遺構名とし、調査年次の関係を表にして示した。(Fig 1)

遺構番号	現況調査	発掘調査					従来の説
		1次	2次	3次	4次	5次	
S B01	○					○	礎石建物
S B02	○	○			○	○	" (仏殿)
S B03	○						"
S B04		○			○	○	" (法堂)
S B05		○			○	○	" (方丈)
S B06		○	○	○			" (門)
S B07			○	○			" (総門)
S B08			○	○			掘立柱建物 (総門)
S B09			○	○			" (三門)
S B10				○			"
S B11					○		礎石建物
S X01	○						柵木
S X02	○						"
S X03	○				○		墓、塚

Fig 1 遺構と調査年次

S B01 これまでに確認されている建物は、いずれも丘陵の裾部分に立地しているが、このS B01は丘陵斜面の中腹に造成した平坦部に立地している。裾部との比高は約8mほどである。礎石列2と3の間がA～Dまで深く掘られて凹地になっていて、現存する礎石は地表に見えている。発掘調査は一度も実施されていないので詳細は不明であるが、現存する礎石から推測して一間四面の建物が考えられる。第5次発掘調査における礎石の平板実測図によって柱間寸法を計測して

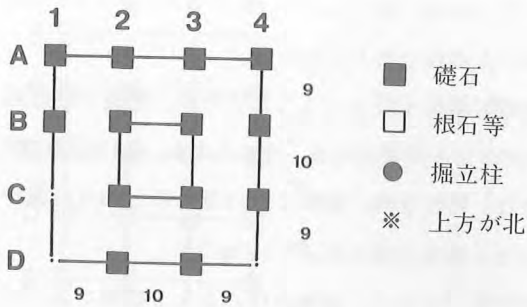


Fig 2 S B01

な計測値が記録されている。〈図面1〉

7間×6間堂と7間×4間堂 第1次発掘調査で7間×6間堂として復原され、仏殿と推定されている。A, B列で礎石を確認し, C~E列で根石を確認しているが, F~H列では何も検出していない。7間×6間堂はS B02, S B04, S B05に共通する中軸線が想定できることによる復原であったと推測される。

〈図面2〉を見ると, 7間×6間堂の外に根石ではないかと思われる集石が2ヶ所実測されてある。位置はC2とE1である。図上で計測すると, C2~C3が約8.5尺, E1~E3が約18.5尺である。仮に, 2列でさらに根石等が確認されて, F~H列はないものとすれば, 南面する7間×4間堂の復原が可能となる。この場合, 桁間寸法は8.5+10+10+10+10+10+8.5尺となり, 梁間寸法は10+10+10+10尺であろう。(Fig 3)

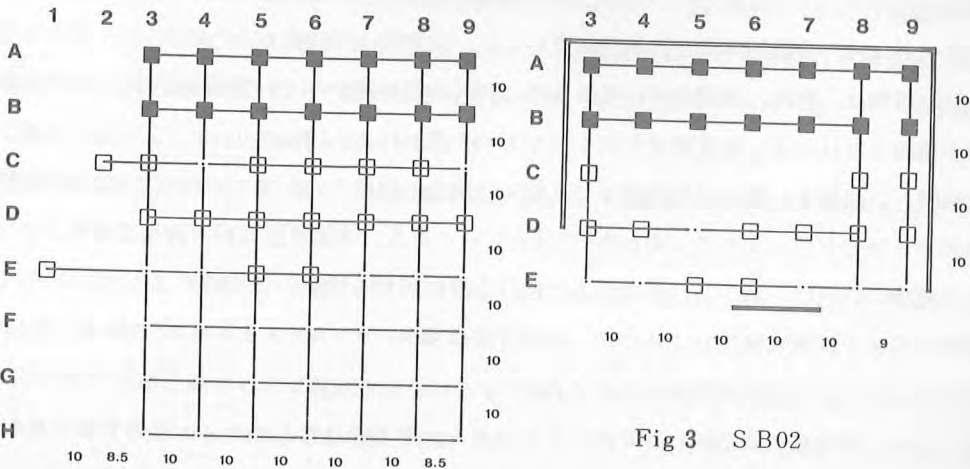


Fig 3 S B02

みると, 桁行, 梁行とも8.4~8.7 mである。2~3とB~Cが3 mになることなどから9+10+9=28尺であると思われる。心礎は存在していないが, 塔などの可能性もあると思われる。(Fig 2)

S B02 丘陵裾の広い平坦部の奥まった位置に, A列とB列の礎石が知られていた。礎石間の計測は何回かおこなわれていて, 様々

5間×4間堂 第4~5次発掘調査によって, S B02建物のF~Hと1, 2列は存在しないことが確認された。さらに, 建物の周囲, 東, 西, 北側に溝が検出され雨落溝と考えられている。溝は各側柱列から1.3m前後の間隔がある。東側の溝はE列付近で, 西側の溝はD列付近で見えなく

なる。南側は平面で検出されていないが、6列と7列の断面に溝が見える。側柱列からやはり1.3m前後であることから雨落溝は他の三辺同様に南側にも存在したと思われる。

建物は溝の範囲内におさまるとすれば、桁行6間、梁行4間ということになり、桁間寸法は10+10+10+10+9尺となり、梁間寸法は10+10+10+10尺になる、今のところ、C4とC7に根石等が検出されていないので柱はないものとすれば、桁行5間、梁行2間の身舎に、10尺の廂が南と北側につき、さらに9尺の廂か下屋が東側につく建物と思われる。(Fig 3)

現在確認されている建物の中で一番大きいことに変わりはなく、遺跡の中心となる建物であったと思われる。

S B 03 <図面1> 現況調査によって礎石6、根石8を確認している。S B 06とS B 07がこの中に含まれている可能性があると思われるが、発掘調査の成果と重ね合わせることができない状況にある。しかし、この地区に礎石と根石をこれだけ確認できた時期のあったことは注目しておきたい。(Fig 5)

S B 04 <図面3> 第1次発掘調査において、礎石4、根石15を検出し、東面する5間×3間堂を復原し法堂と推定した。桁間寸法は9+10+10+10+9尺、梁間寸法は10+10+10尺と計測している。(Fig 4)

第5次発掘調査ではF列とE列の一部を調査するにとどまったので、<図面3>と写真によって検討した結果として次のことを指摘しておきたい。

(1) A列には根石等はないと思われる。

(2) A~B間を9尺と計測しているが、A1の根石としている集石とB1の間は7.5尺しかない。

(3) E~FはA~B同様9尺と計測されているが、実測図上で10尺がとれる。

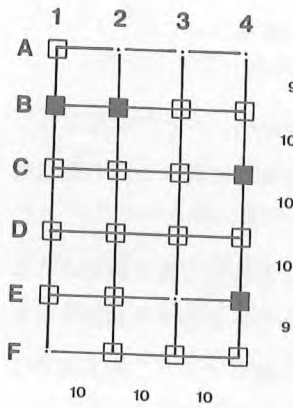
S B 04建物は、桁間、梁間各々10尺の身舎に10尺の四面廂がつく一間四面堂に、さらに10尺の孫廂が南面にだけつき、礼堂部分を広くしたものと思われる。(Fig 4)

S B 05 <図面4> 第1次発掘調査で3間×2間堂と復原され、方丈と推定された。桁間寸法は26尺を3等分しているのので1間が約8.7尺ぐらいになる。梁間寸法は10+10尺である。

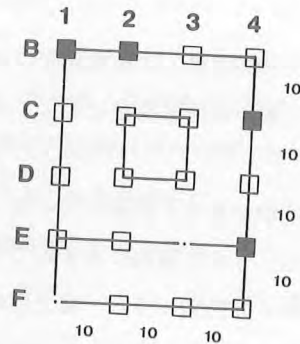
この建物の特色は、第1に、桁間寸法で桁行全表の26尺を柱間の3で割る寸法をとっている。実測図と写真を詳細に検討してみたが、桁間寸法は多少バラツキがあるものの、9+8+9尺や8+10+8尺などになる可能性は今のところない。

第2には、側柱筋の礎石間に石が列ぶことである。壁を受けたものか、土居桁を受けたのか判断がつかないが、今のところ、この建物にだけ見られる。建物自体が小さいこともあるが、礎石も比較的小さい。(Fig 4)

S B 06 第1次発掘調査において、1個だけ地表で確認されていた礎石で、門の一部になる可能性が考えられていた。S B 03のうちの1個である可能性があるが特定できない。



S B04



S B05

Fig 4 S B04, S B05

第2～3次発掘調査で周辺部も含めて発掘され、根石を伴う礎石であることが改めて確認されたものの、この礎石につながる礎石や根石が検出されていない。今のところ1個だけであるが、礎石建物の一部として今後の精査をまちたい。

S B07 第2次発掘調査において、桁行5間、梁行3間の礎石建物で、桁間寸法は7尺等間、梁間10尺等間の総門と推定された。第3次発掘調査では、前回未調査部分も含めた全体を発掘した結果、桁行5間、梁行4間、柱間寸法は桁間10+7+7+7+10尺、梁間9+9+9+10尺の建物に訂正された。

具体的な検討に入る前に遺構の検出状況を整理しておきたいと思う。これまでの報告書によると礎石の据付方法に次の6種類がある。

(1)据付穴にそのまま礎石を据える。(2)(1)に根石をおいて据える。(3)三和土で固めて礎石を据える。(4)(3)に根石をおいて据える。(5)小礫で固めて礎石を据える。(6)(5)に根石をおいて据える。

掘立柱建物についても、(1)掘方に柱痕跡の見えるもの、(2)掘方だけのもの、(3)柱痕跡だけのもの、などがあると報告されてある。

これらの違いは、建物毎の工法の違いなのか、あるいは同一建物において混在するものなのか、今のところ判断できない。

S B07建物は礎石建物として復原されているが、礎石の据付方法は3種類、掘立柱の検出状況は2種類が混在している。C4, D4, E1, E3, E4, F1, F2, F3は礎石や根石、A1～A5, B1～B5, C2, C5, D2, E2は掘立柱で掘方も大・小がある。

礎石建物と掘立柱建物が同一平面と規模で重複する事例があるが、今回礎石建物部分で掘立柱建物と重複しているという所見は報告されていない。さらに、実測図を詳細に検討してみると、柱間寸法が報告されている数値と多少違うことも気になるところである。これまでに検出され

た遺構を有効に組み合わせているこの建物は魅力があるが、現状では礎石建物として復原することは困難であろう。(Fig 5)

S B10 (S B08, S B09) S B08は第2次発掘調査において掘立柱総門, S B09は掘立柱三門と考えられていた建物である。第3次発掘調査によってS B08とS B09は6間×3間の掘立柱建物と訂正された。

S B10は掘方の検出状況に2種類があつて混在している。実測図による柱間寸法も報告されている値との差が大きい。さらには、S B07建物に含まれていた掘立柱のことも合わせて検討すべきものと思われるなど、整理のつかない問題が多い。掘立柱建物の存在は確かであり、礎石建物と重複することも确实である。この建物についても今後の精査をまちたい。(Fig 5)

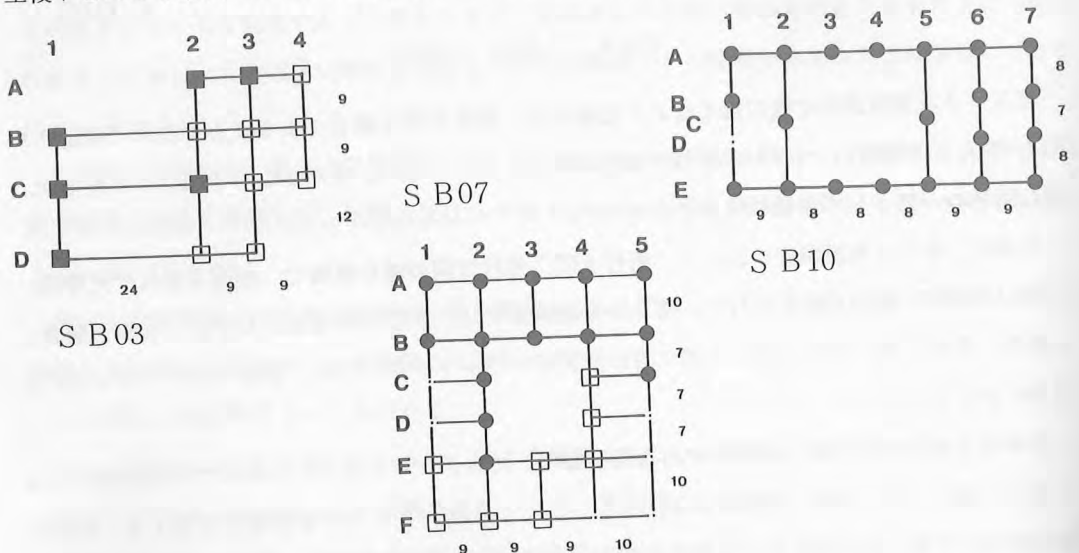


Fig 5 S B03, S B07, S B10

S B11 第4次発掘調査において、S B02の南東地区で検出され、報告書では掘立柱建物と推定している。掘立柱跡は検出されていないが、東西6~6.8m、南北約16.5m+aの幅0.7~1.0mの溝が廻っていて、基壇状の長方形の土壇を検出している。基壇縁に掘立柱?杭?を検出しているようであるが基壇との関連は不明である。この溝を雨落溝とすれば、この建物は掘立柱建物ではなく、礎石建物の可能性がある。しかし、東西方向と南北方向の比が大きいこと、特に東西幅の不足が気になることである。

S X01, S X02 現況調査において、柵列を2ヶ所で発見している。発掘調査でこれらの確認はされていない。整地地業との関連などが考えられる。

S X03 古くから墓とか、塚とかいわれて来たが、第4次発掘調査によって人工的なものであることが確認された。

4. 遺 跡

矢立廃寺の遺構と遺物について再検討を加えて来たが、これらをまとめて遺跡としての検討も必要と思われる。

遺構については、礎石建物S B01, S B02, S B04, S B05 の4棟について、ほぼ確認できた。S B02は五間三面の南面する建物で、遺跡の中の主要な建物と思われる。S B04は一間四面の南に孫廂をつけた南面する建物である。礼堂部分を広くしたものと思われる。S B01は一間四面の南面する建物と思われる。この建物だけが他の建物と異なる立地にあつて、塔などの可能性も考えられる。S B05は全体の規模も礎石も小さい。側柱列に礎が列ぶのはこの建物だけである。

この他に、S B06とS B07については実体が不明であるものの、礎石建物の一部であることについては確実と思われる。1～2棟、あるいは重複する可能性もあり、今後の精査にまちたい。

さらに、S B02の南東地区に礎石建物が存在する可能性があるかと推測されるなかで、S B11の存在があるが、今一ツ躊躇せざるを得ない。あるいは地形的な理由で、さらに東側のS B06やS B07の地区に求めるべきなのかも知れない。

このS B06やS B07の検出される地区は礎石建物と重複して掘立柱建物の検出される地区でもある。掘立柱建物は今のところ、この地区だけで検出されている。この点で他地区と様相を異にしている。掘立柱建物についての詳細は不明という他はなく、1～2棟、場合によっては重複の可能性もある。

矢立廃寺の遺跡全体の南側に整地地業があつて、この最下層から多量の土器が出土する。これは整地前にも土器に伴う遺構の存在したことを示すものである。遺物の内容が整地後の遺構に伴うと判断されている遺物とまったく同じであるところから、遺構の性格や年代はほぼ同じであると考えられる。

これまでの現況調査や発掘調査において、まったく指摘されていないことであるが、遺跡の南前方は一段低く、現在は水田となっているが、ここに池が存在する可能性はまったくないのであろうか。特に、整地地業との関係や、現況調査における柵跡との関係、遺跡内にある湧水が遣り水になることの可能性など、今後の課題としておきたい。

出土遺物では、特に注目しておきたいのは「かわらけ」である。平泉出土のものと酷似している。東北地方におけるかわらけの出土遺跡は多くない。集落での例はなく、平安時代から中世ぐらいの寺跡、館跡、柵跡などと思われる遺跡からの出土が多い。東北地方にかぎったかわらけの研究はほとんどなく、一般的には平泉との対比によって遺跡の性格や年代観を考えている。このような現状から、平泉との対比において、矢立廃寺跡を12世紀後半の時期の寺院跡と考えている。

IV ま と め

矢立廃寺跡について、これまで定説化していた禅宗寺院説は遺構の平面や規模、遺構の配置関係、遺物の年代観や用途などから判断して否定せざるを得ない状況となった。

しかし、矢立廃寺は新たに、12世紀後半の寺院跡の可能性が具体化した。

このことは東北地方の古代史上重要な発見であるといえる。まづ第一に、古代陸奥、出羽の北辺における寺院分布をさらに北に広らげたことになるからである。北上川流域の奥地には、どじの沢小堂跡、黄金堂遺跡などが分布し、馬淵川流域の奥地には天台寺が知られている。今回は米代川流域の奥地に矢立廃寺を加えることとなったのである。そして三者に共通することは、分水嶺を越える入口となるような各流域の奥地に立地することである。交通路との関連を示すのであろうか。矢立廃寺は、矢立峠の入口に立地している。

矢立廃寺は、独特の景観をもつ男神岳と女神岳を南前方の左・右に見る丘陵の裾部に立地している。国土地理院発行5万分之1地形図の「碓ヶ関」初版によると、中羽立、白沢の集落から男神岳、女神岳の間を通過して、矢立廃寺跡を経由し、松原の集落につながる道が記されている。地元では古くからの道と伝えられているという。遺跡の南方、大館方向の平地には、粕田、大館野遺跡という平安時代の中期、後期の集落群も分布しているなど、矢立廃寺の立地は、この場所であることの必然性があったように思われる。

もう一つは、一般的に12世紀後半の大館地方といえば、吾妻鏡の文治5年8月16日条や9月3日条に見える、藤原泰衡、比内（肥内）郡、贅柵、河田次郎などを思い出すにはいられない。矢立廃寺はこうした大館地方と奥州藤原氏との関係に新たな局面を開いたことになる。当然のことながら、これらの関連遺跡の所在が問題となるであろう。いくつかの疑定地があると聞いているが、今後、この方面の調査と研究が急務であり、このことによって矢立廃寺の性格がより明らかになると思われる。

謝辞 今回のはかぎられた条件のなかでの検討の結果であるために、今後の精査の成果によって、再度検討が加えられるべきものであるが、このような状況であるにもかかわらず発表の機会を与えていただいた大館市教育委員会に感謝申し上げます。

大館市教育委員会と大館市史編纂委員会には検討のために多くの資料を提供していただきました。

調査担当者の板橋範芳氏には終始お世話をいただきました。

秋田県教育委員会の富樫泰時氏には関係資料の提供などのお世話をいただきました。

このような多くの方々のご指導とご協力に対して厚くお礼を申し上げます。



(1) 遺跡近景 (東ヨリ), 中央白テントの位置がA区, 後方の山が男神山



(2) 遺跡近景 (南東ヨリ), 白テントがA区、写真右奥の山が城ヶ倉山



(1) 第3次調査 A区東側（北側崖中腹ヨリ）



(2) 第3次調査 A区西側（北側崖中腹ヨリ）



3b



4b



5b



6b



6c



7c



8c



7d



8d



A区北崖側面に寄せられた礎石



6e



8e

A区全体写真(西ヨリ)



第3次調査 A II 建物跡 (礎石建物) 根石配列



(1) 第3次調査 B区トレンチ (写真左から a・b・c・c')



(2) B区C'トレンチ検出の掘り込み遺構



(1) 第4次調査区(北側台地上ヨリ)、正面の山が女神山



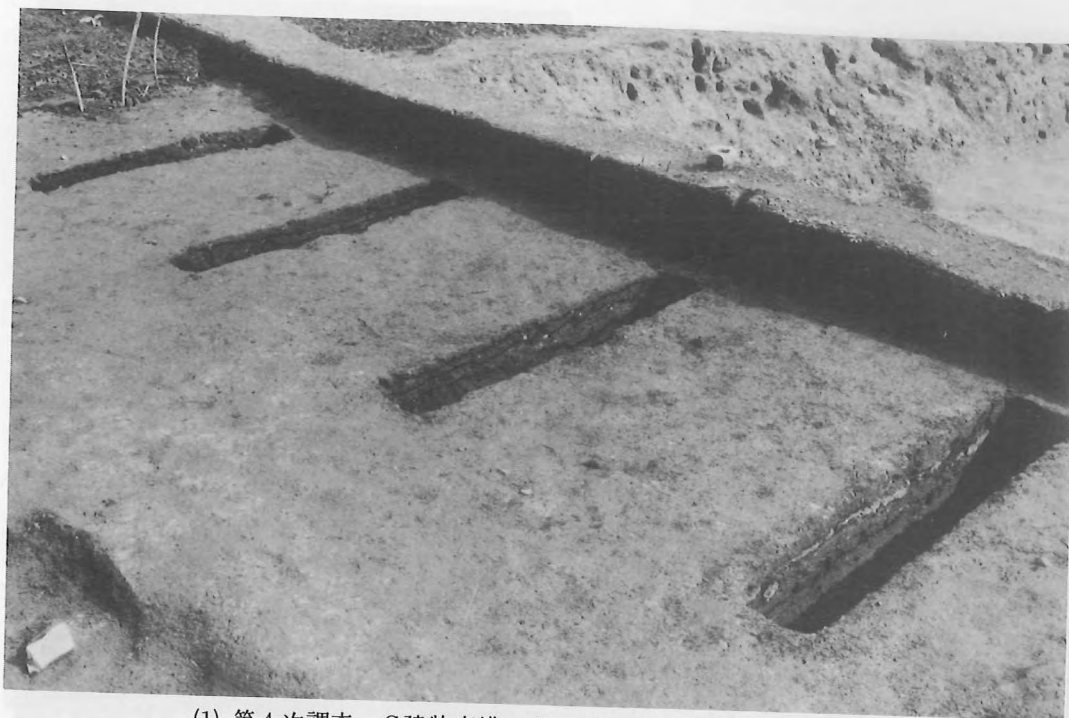
(2) 第4次調査 C区全体写真(東側崖中腹ヨリ)



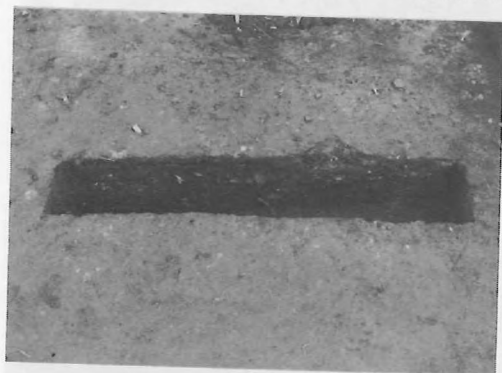
(1) 第4次調査 C建物北東隅部(西ヨリ)



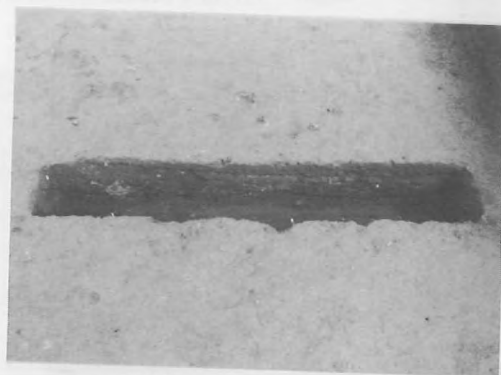
(2) C建物の西側に寄せられた礎石



(1) 第4次調査 C建物東溝の南側延長線上の溝確認トレンチ



(2) 同上 hライン土層



(3) 同上 iライン土層



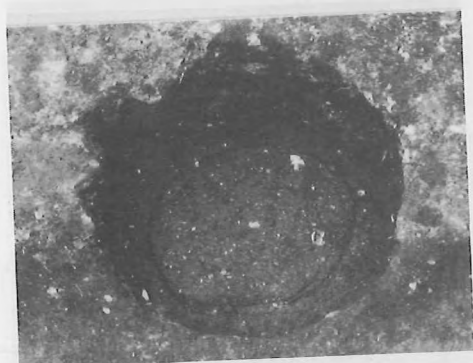
(4) 同上 jライン土層



(5) 同上 kライン土層



(1) 第4次調査 B建物全体写真(北側崖中腹ヨリ)



(2) 掘立柱痕



(3) 掘立柱痕



(4) B建物北側の状態



(1) B建物東溝下位の掘立柱



(2) 右写真の左側掘立柱



(3) 右写真の右側掘立柱



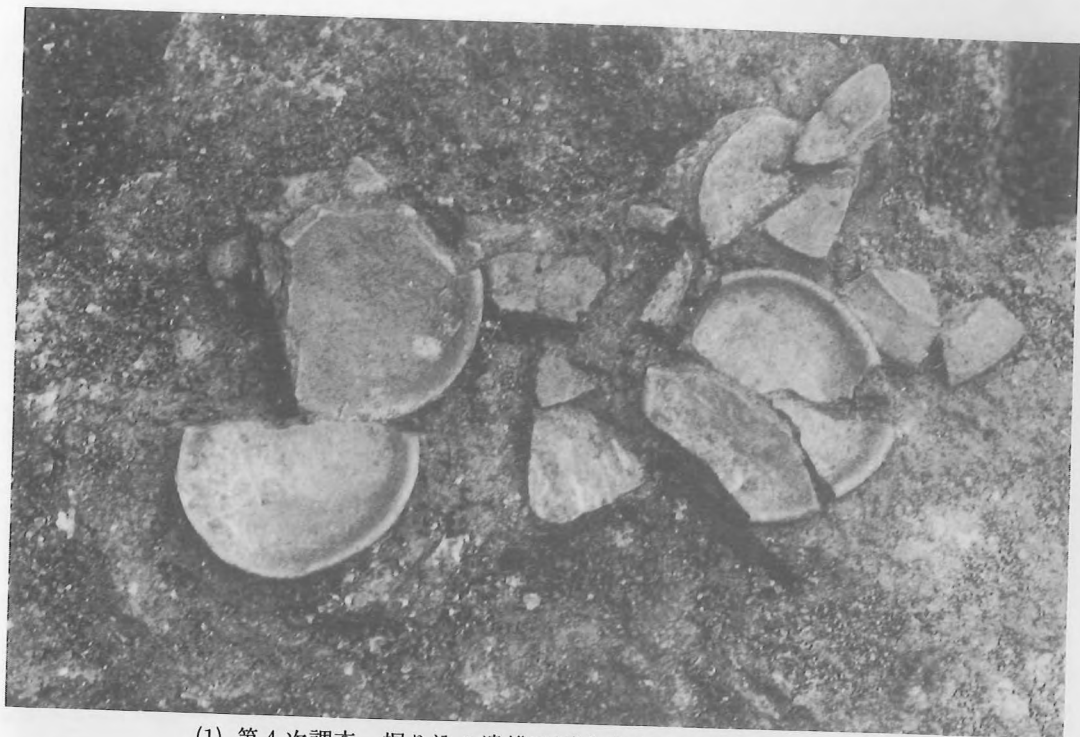
(4) 第4次調査 掘り込み遺構Ⅱ区(北東側崖中腹ヨリ)



(1) 第4次調査 掘り込み遺構Ⅱ区(東ヨリ)



(2) 第4次調査 掘り込み遺構Ⅲ区(南東ヨリ)



(1) 第4次調査 掘り込み遺構Ⅱ区火床上のカワラケ出土状況



(2) Ⅲ区カワラケ出土状況



(3) Ⅲ区カワラケ出土状況



(4) Ⅲ区カワラケ出土状況



(5) Ⅲ区珠洲鉢出土状況



(1) 第4次調査 円丘状遺構近景（東ヨリ）



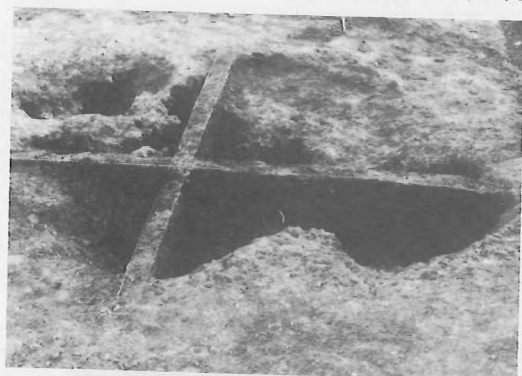
(2) 円丘状遺構の
過去の盗掘坑（北ヨリ）



(3) 円丘状遺構の
過去の盗掘坑（南ヨリ）



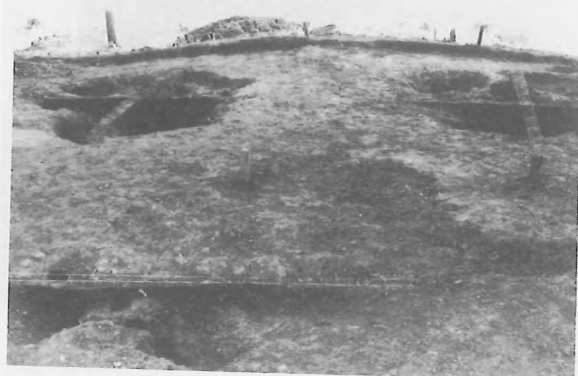
(1) 第4次調査 円丘状遺構頂部の調査 (東ヨリ)



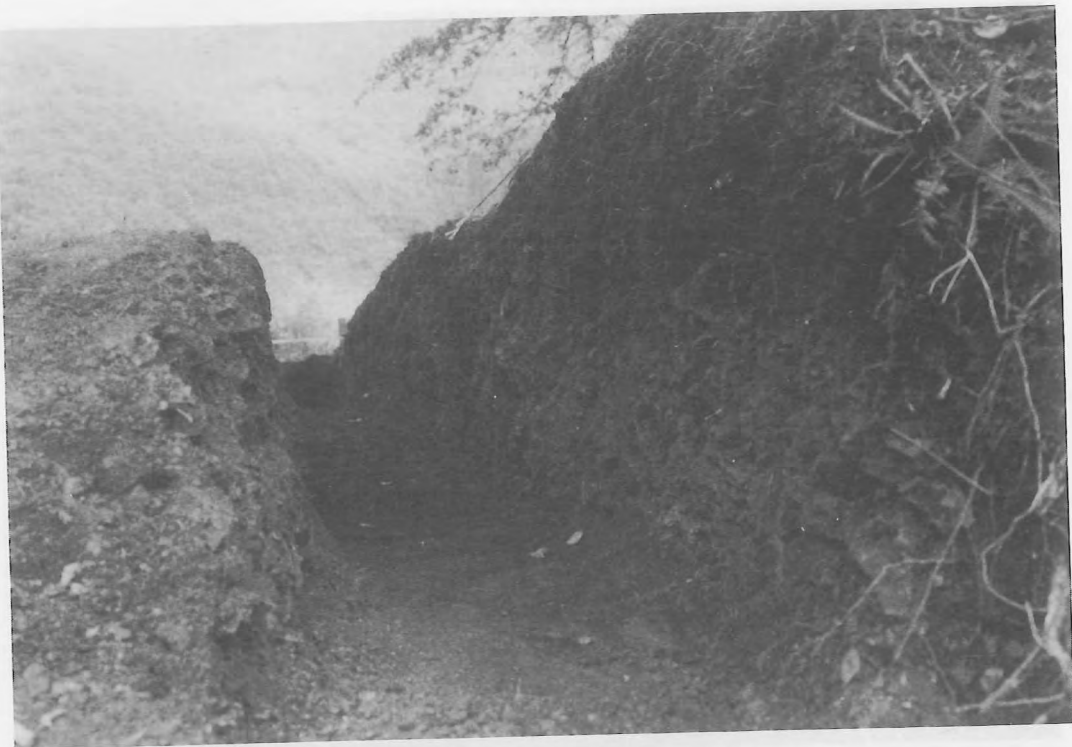
(2) 頂部の不整形ピット



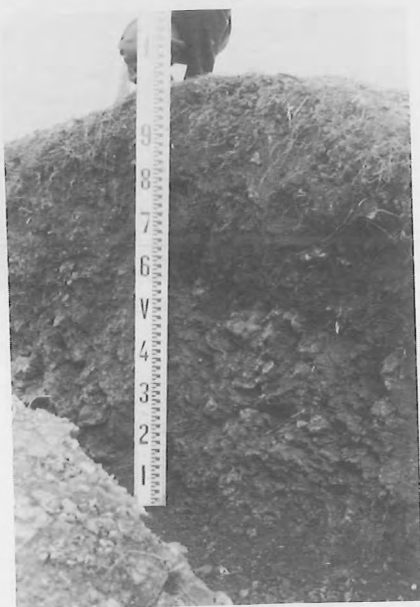
(3) 頂部の不整形ピット



(4) 円丘状遺構頂部 (西ヨリ)



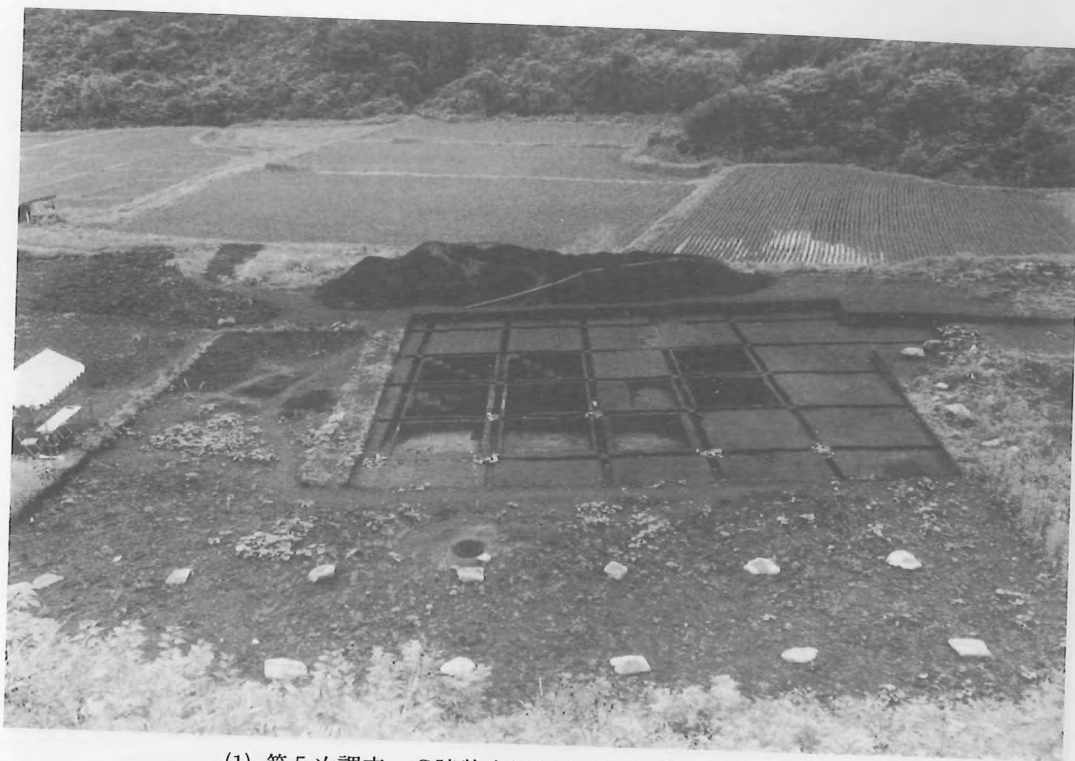
(1) 第4次調査 円丘状遺構の土層断面



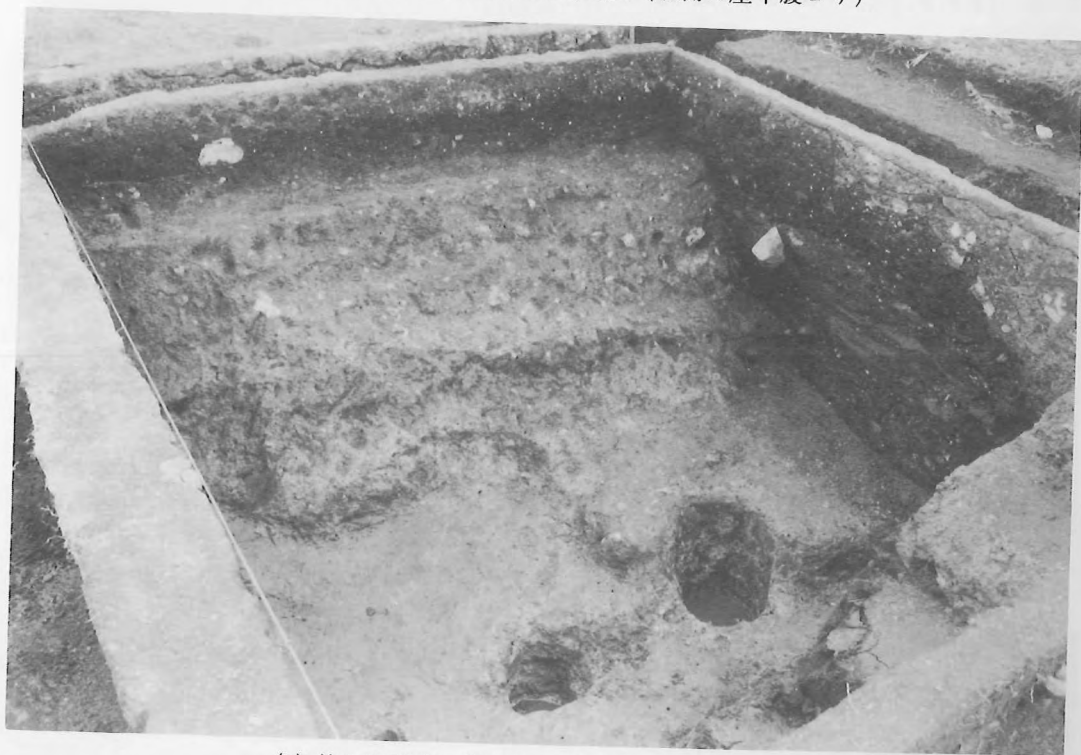
(2) 円丘の主塊である風化玄武岩



(3) 円丘の土層観察用トレンチ



(1) 第5次調査 C建物南側調査区(北側の崖中腹ヨリ)



(2) 第5次調査 掘り込み遺構V区(南西ヨリ)



(1) 第5次調査 掘り込み遺構Ⅴ区(南西ヨリ)



(2) 第5次調査 掘り込み遺構Ⅵ区(南東ヨリ)



(1) 掘り込み遺構V区西壁の土層断面、右の根石が5d (5・6—dライン、東ヨリ)



(2) 掘り込み遺構VI区西壁の土層断面 (6・7—dライン、東ヨリ)



(1) 掘り込み遺構Ⅷ区西壁土層断面 (6・7-eライン) と第3号ピット (南東ヨリ)



(2) 第3号ピット近景 (ピット内から種子と刀子状木製品が出土)



(1) 5・6-cラインの溝遺構



(2) 5・6-dライン東側の溝遺構



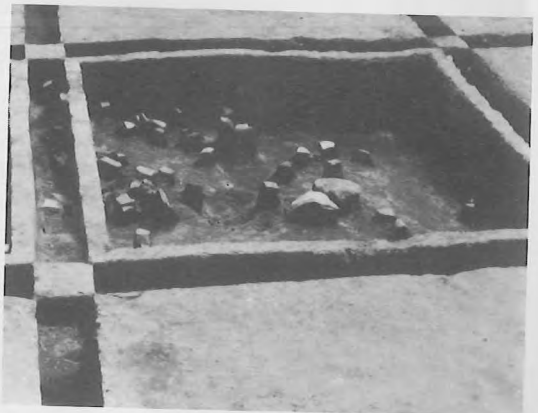
(3) 5・6-dライン西側の溝遺構

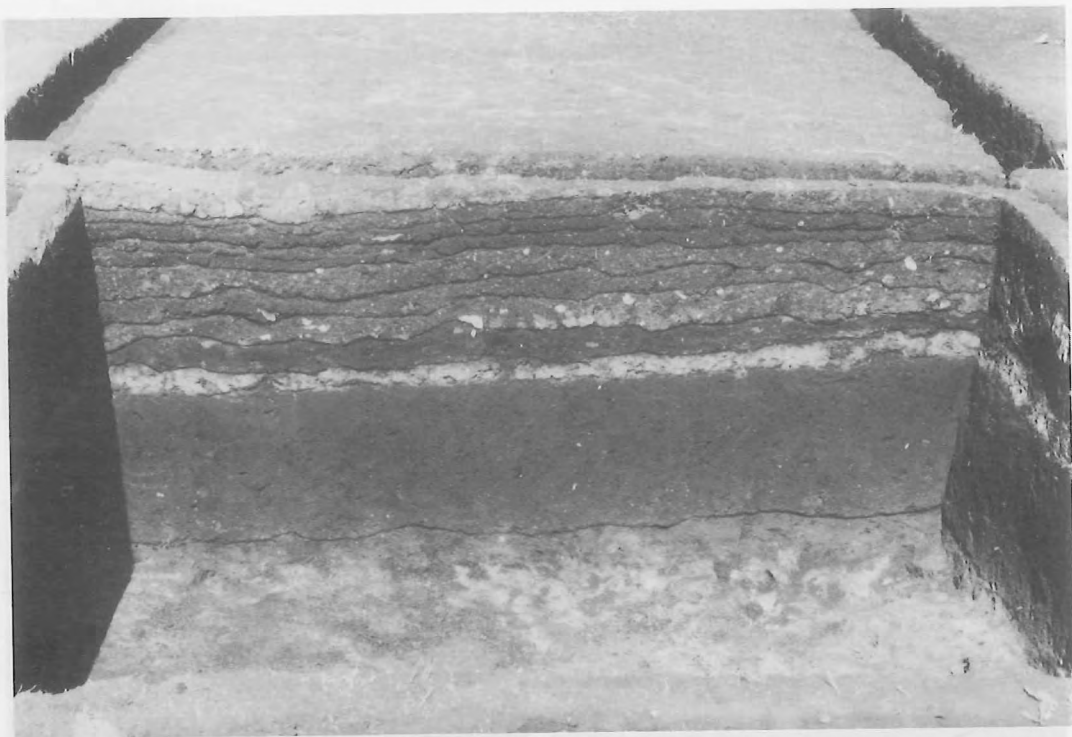


(4) VII区の掘立柱（図版32参照）



(5) 須恵器系陶器出土状況(5・6-f・g区、西ヨリ)

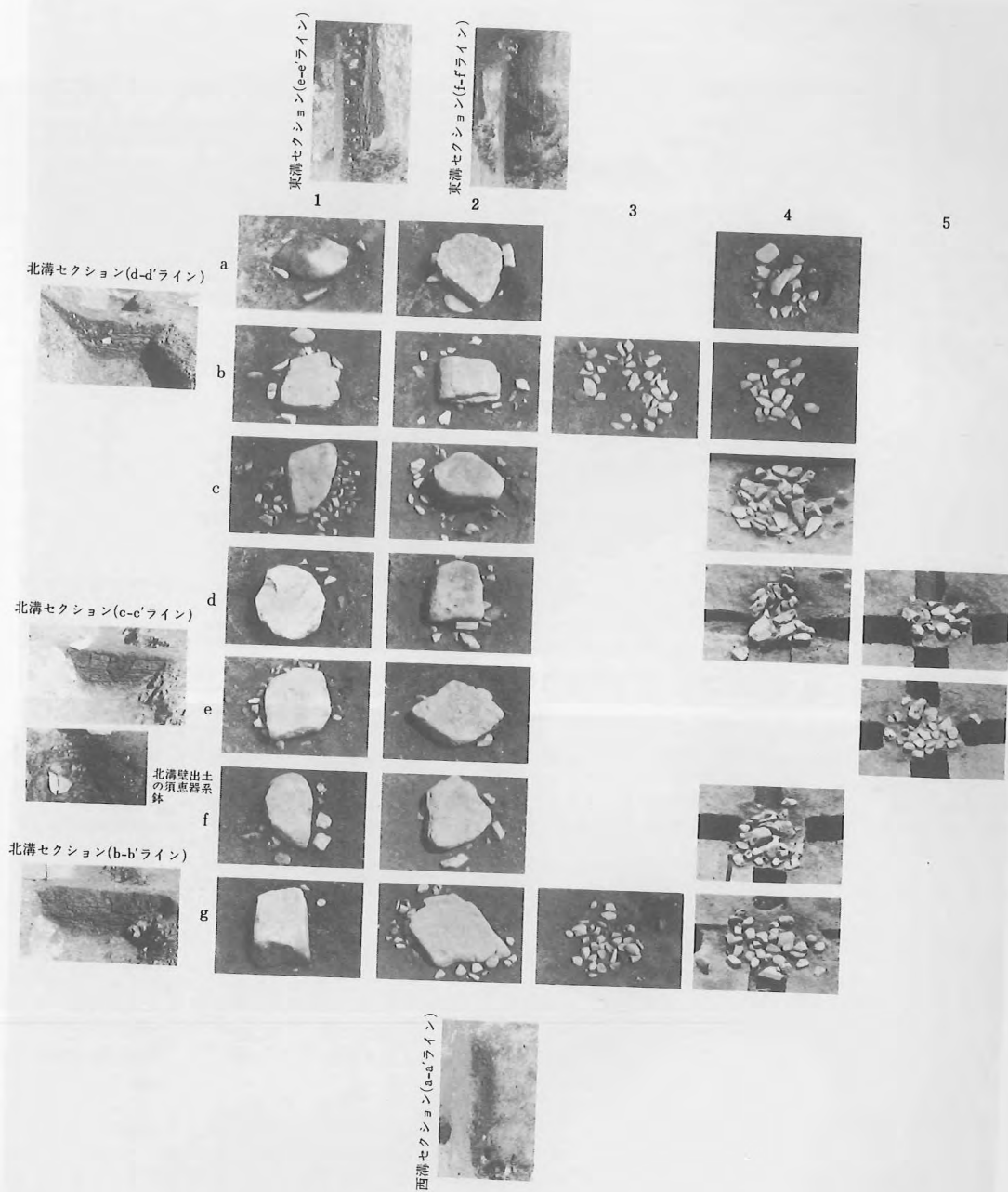




(1) 第5次調査 5・6-f・g区の5・6-gライン土層断面（東ヨリ）



(2) 第5次調査 5・6-f・g区の5・6-fライン北部の軽石質火山礫層とその上位の須恵器系陶器片



C建物礎石、根石、溝セクション配置図



(1) 第5次調査 D建物南側柱根石列と東側の段差（東ヨリ）



(2) 第5次調査 D建物南側柱根石列（西ヨリ）



(1) D建物南側柱東端根石



(2) D建物南側柱中央根石



(3) D建物南側柱西端根石



(4) D建物西側柱の南から二列目根石



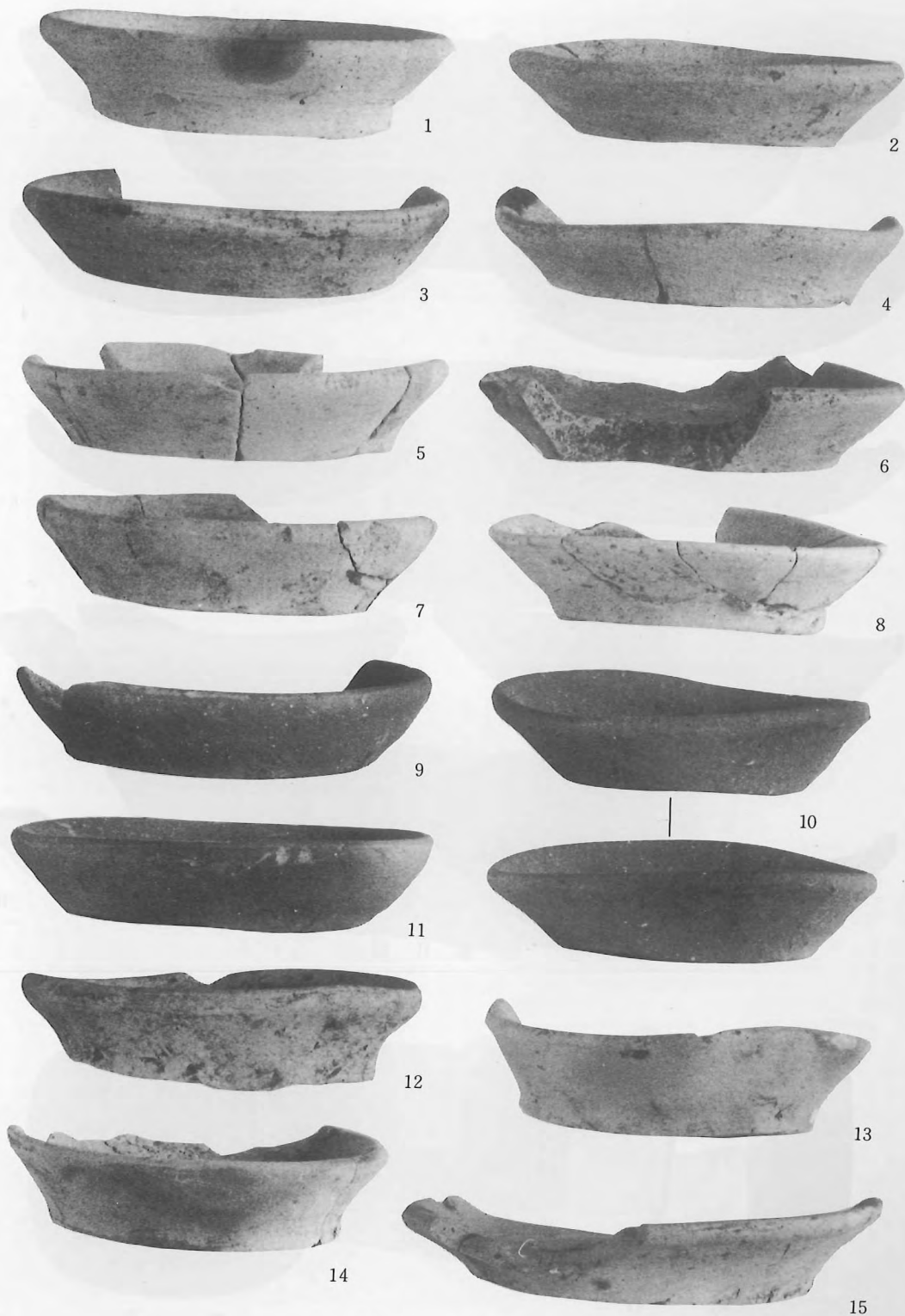
(5) E建物 南側柱礎石列 (西ヨリ)



(1) F 建物礎石配列現況写真（北側の崖中腹ヨリ）



(2) F 建物礎石配列現況写真（東側ヨリ）



小皿 I 類



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

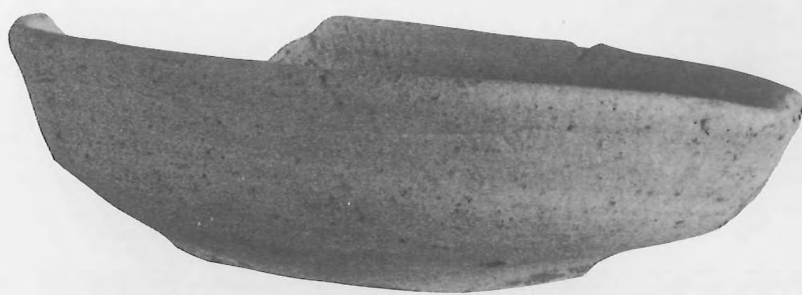
小皿 II 類



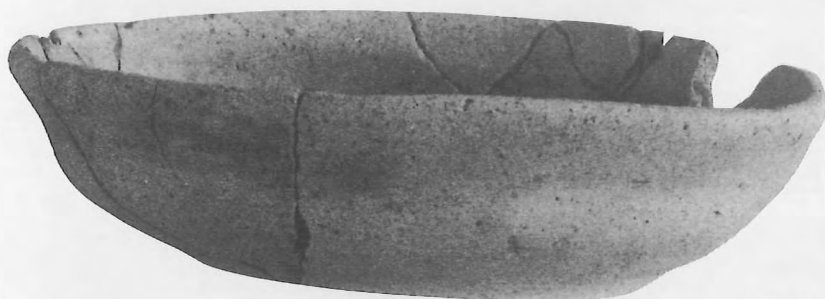
砥 石



磨 石



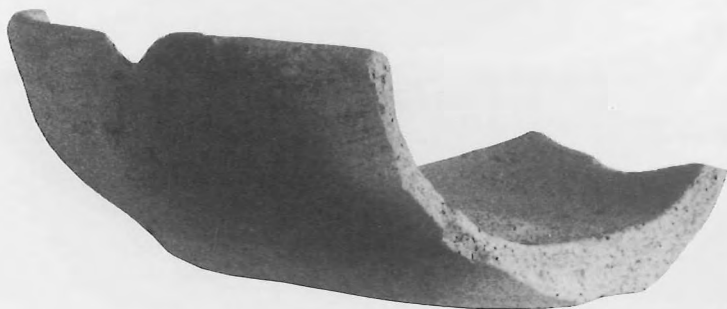
1



2

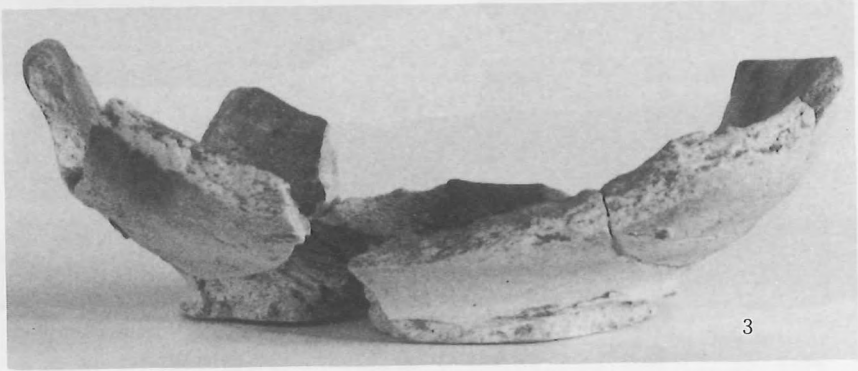
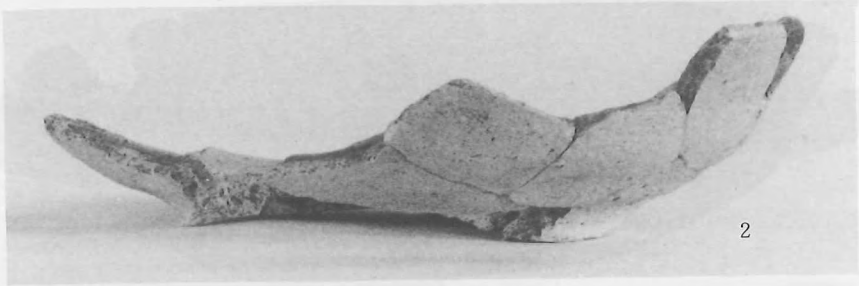
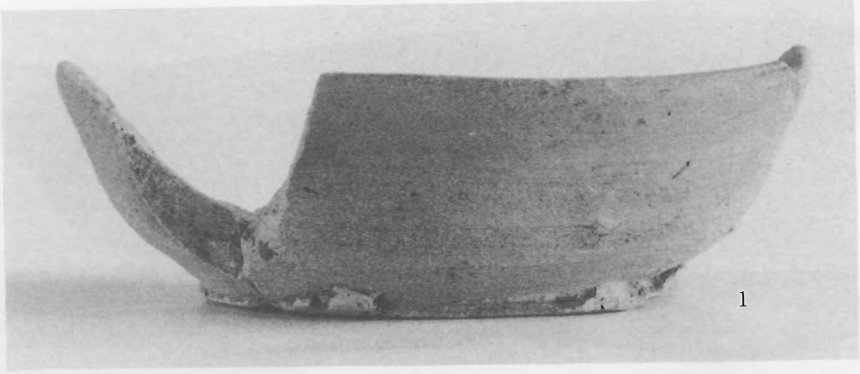


3

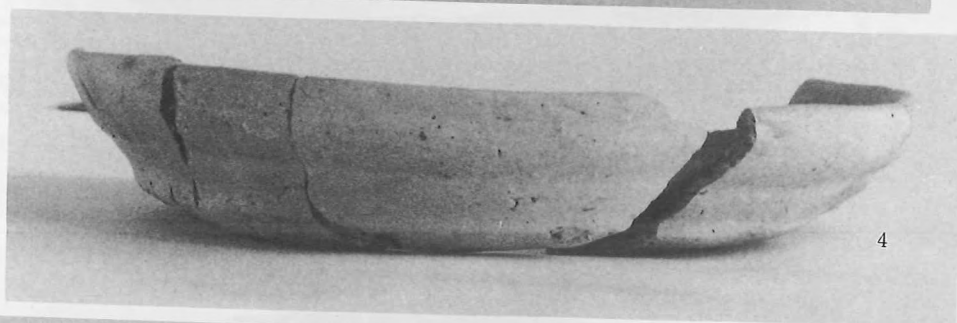
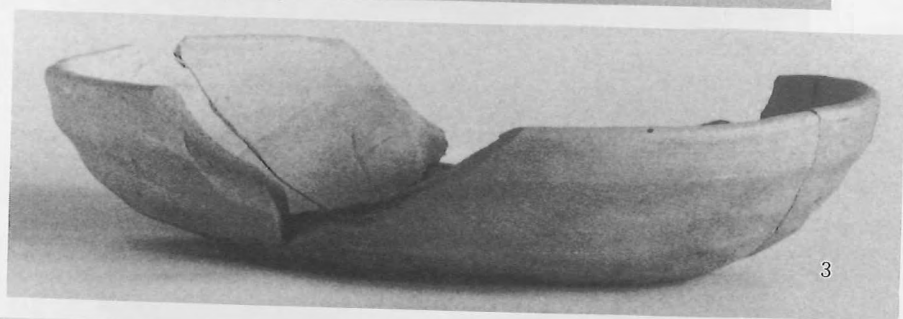
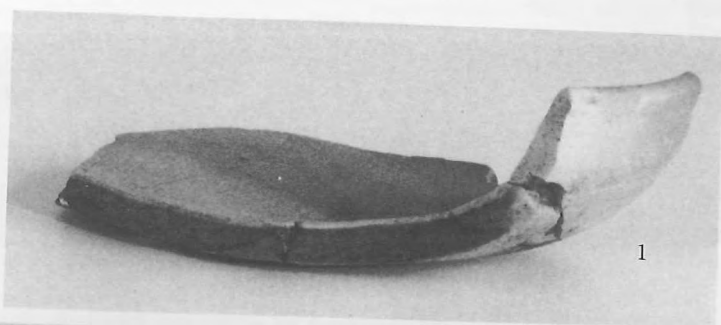


4

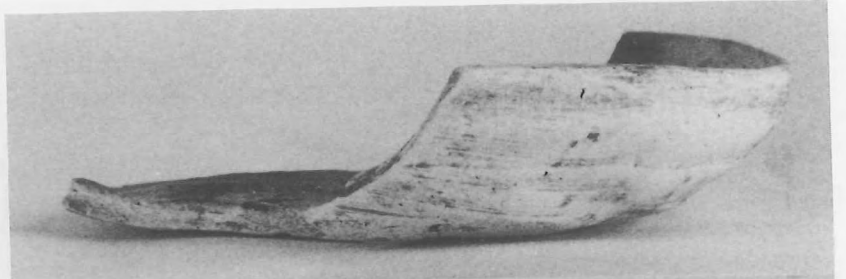
皿 I 類



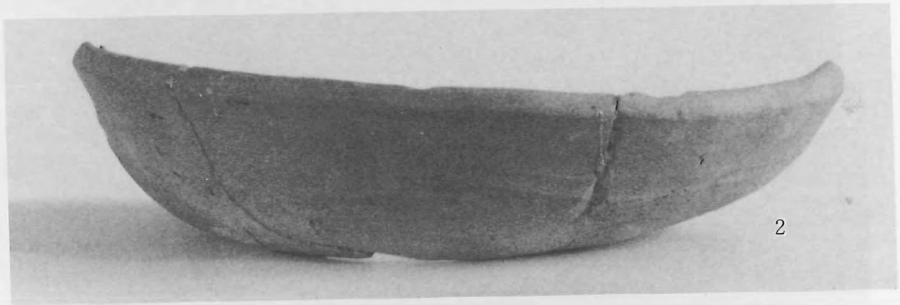
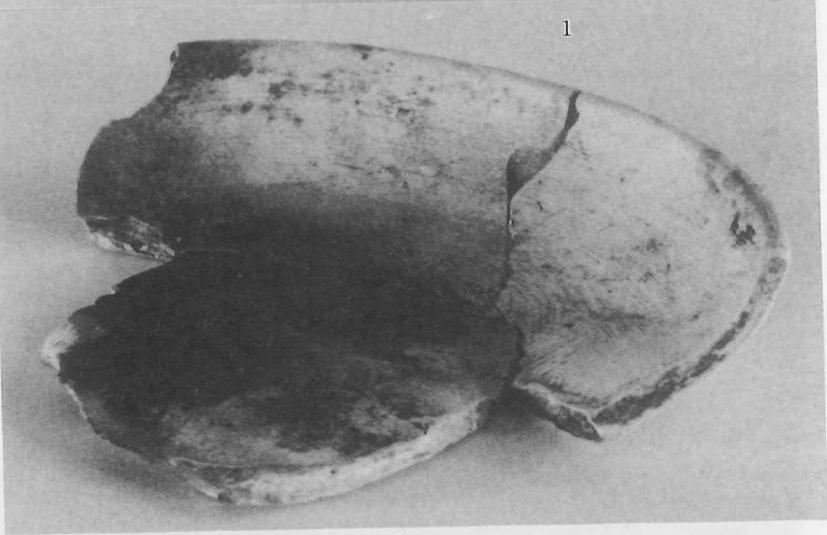
皿 I 類と碗



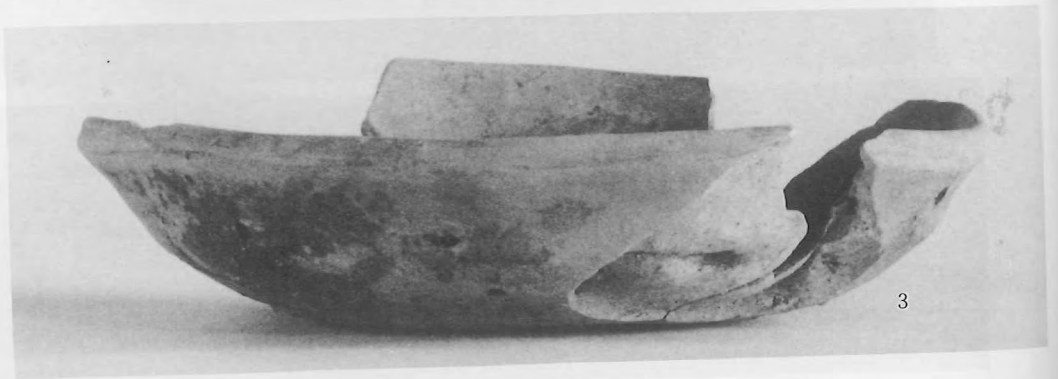
皿 II 類



1

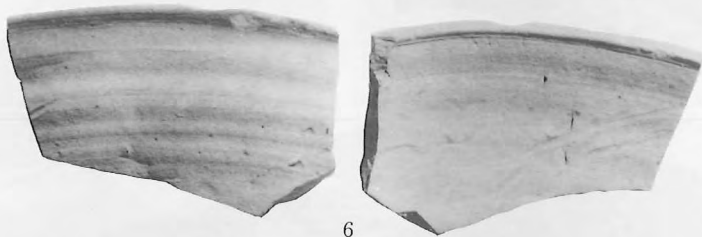
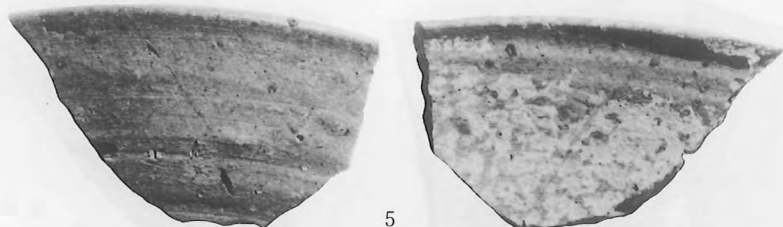
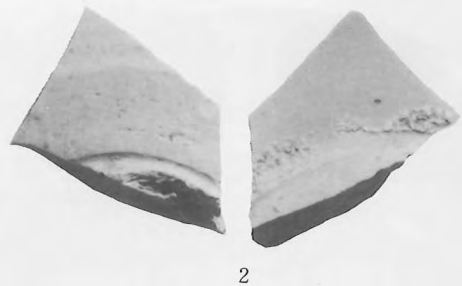
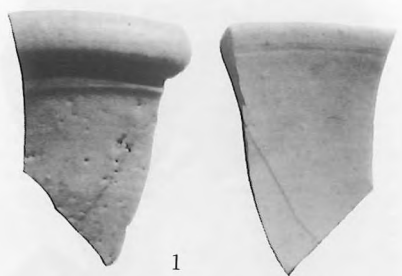


2



3

Ⅲ II 類



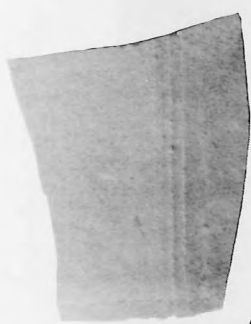
陶 磁 器



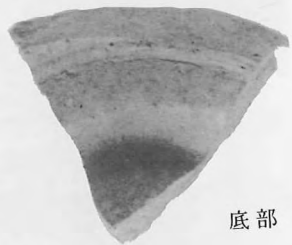
口頸部



体上部



体部

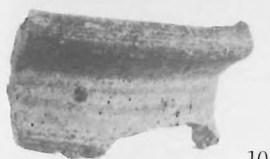
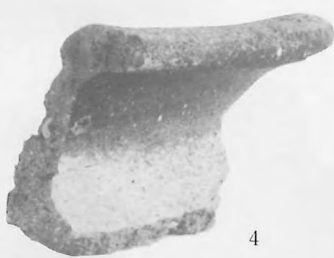


底部

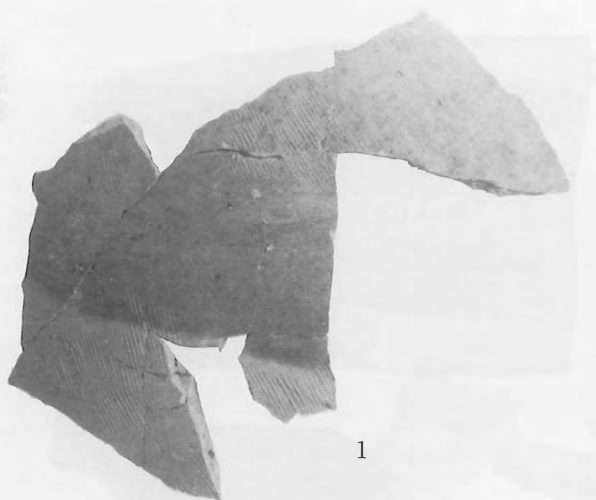
四耳壺



柱根



須惠器系陶器口頸部



1



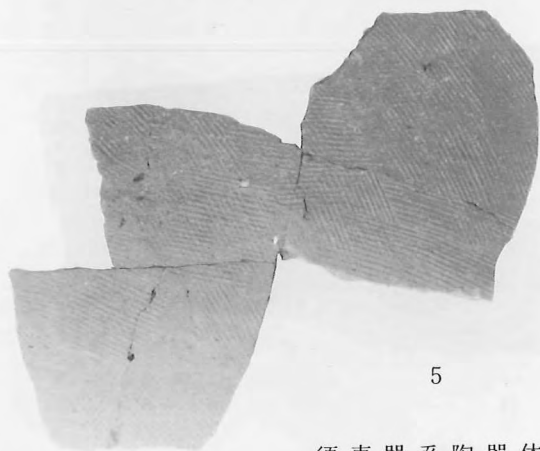
2



3



4



5



6

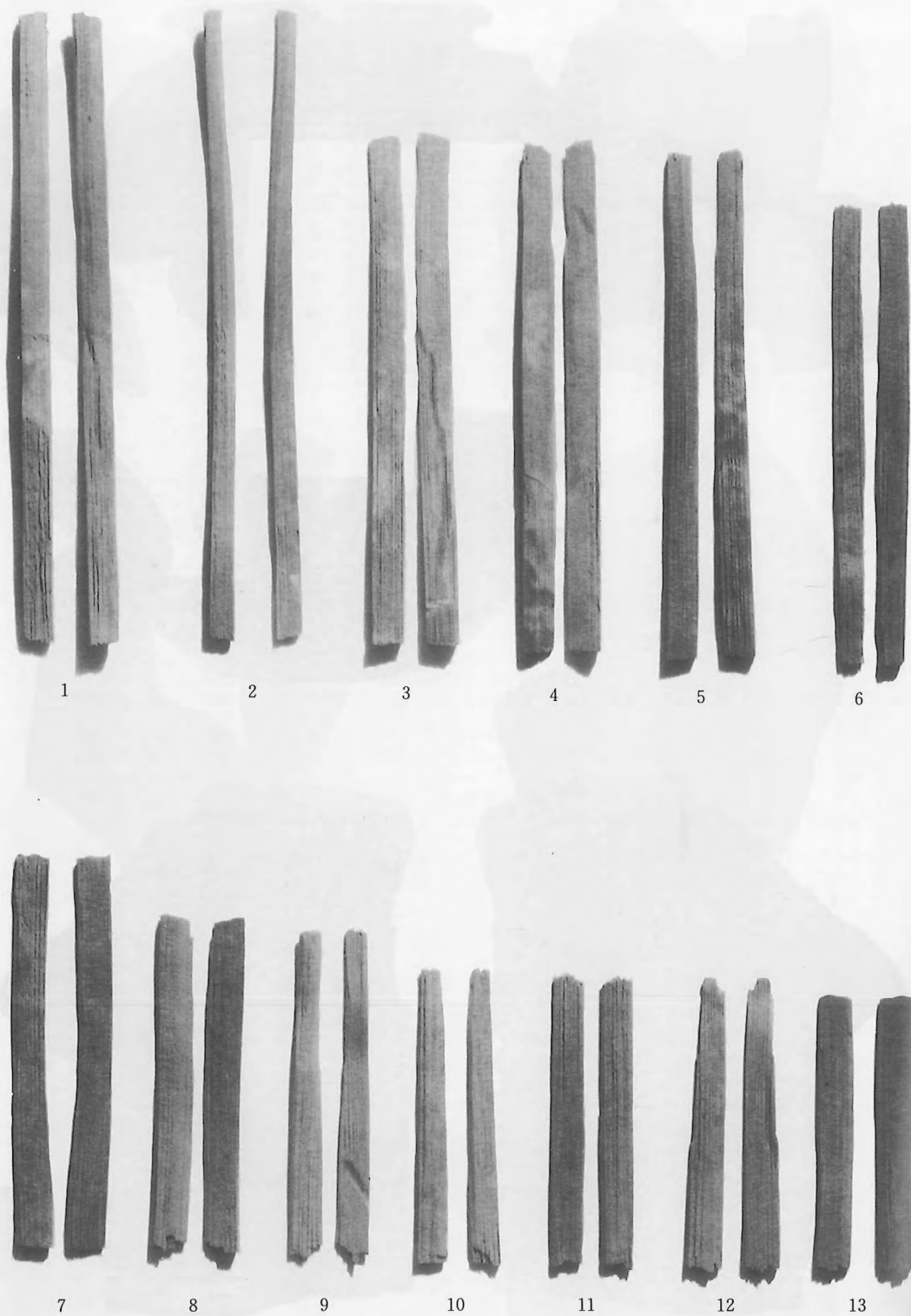
須惠器系陶器体部



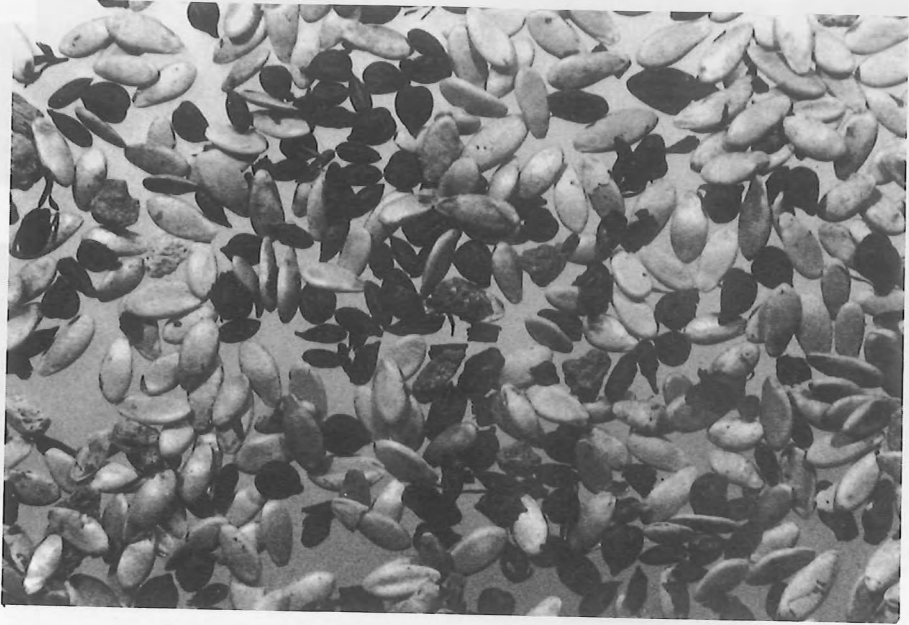
大 壺



第2号ピット開口部出土(上半)の破片と、掘り込み遺構床面
柱穴開口部出土(下半)破片の接合



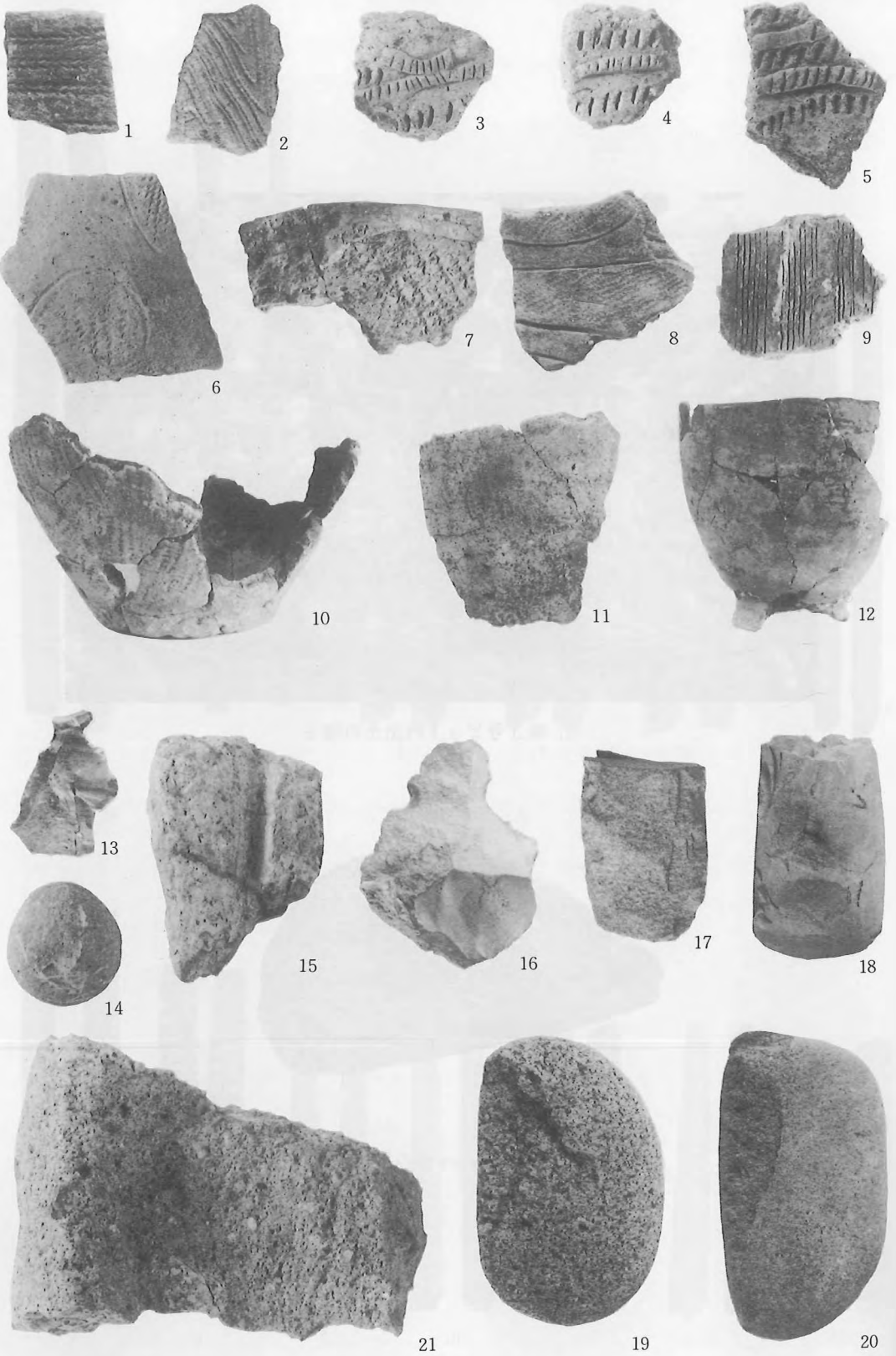
第3号ピット内出土の刀子状木製品



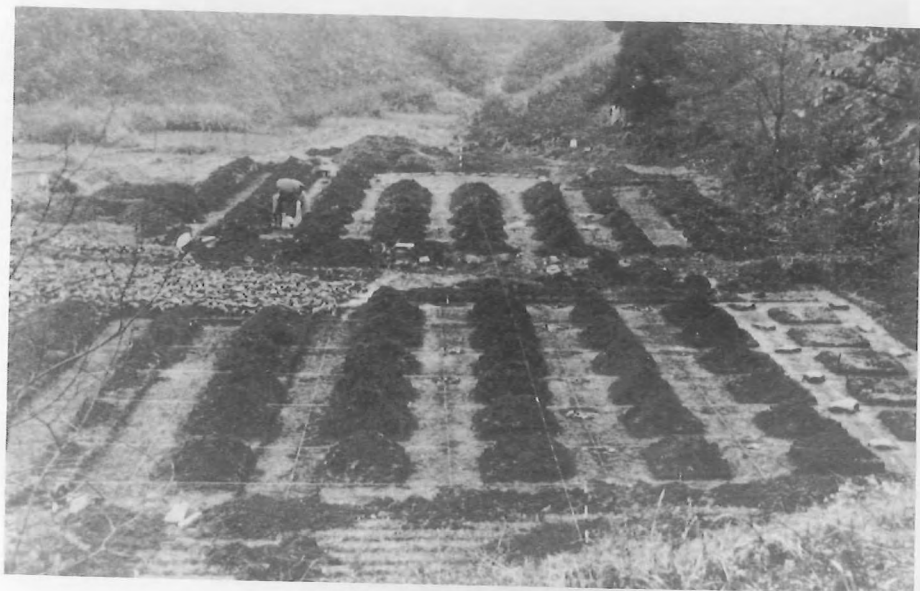
(1) 第3号ピット内出土の種子



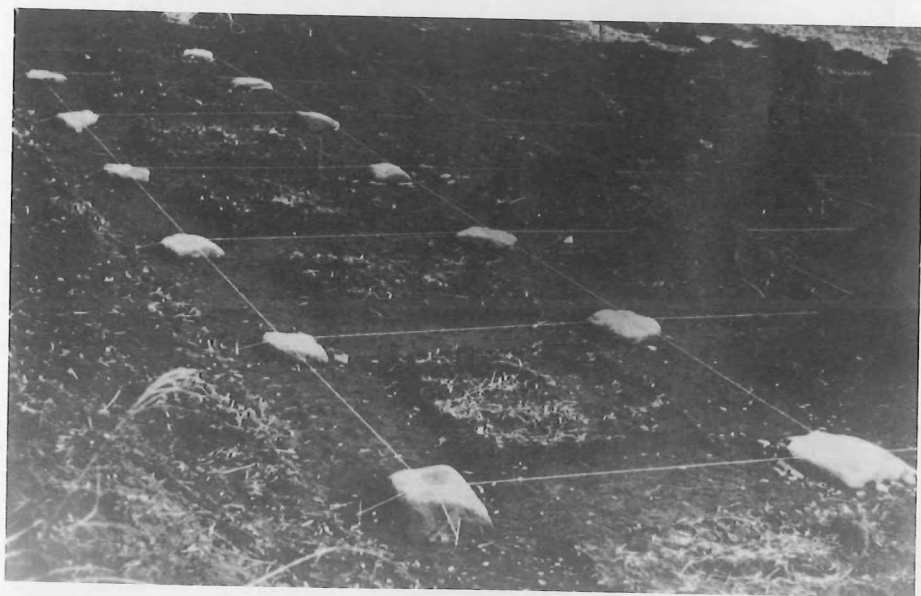
(2) 同上 Malus 属の炭化種子



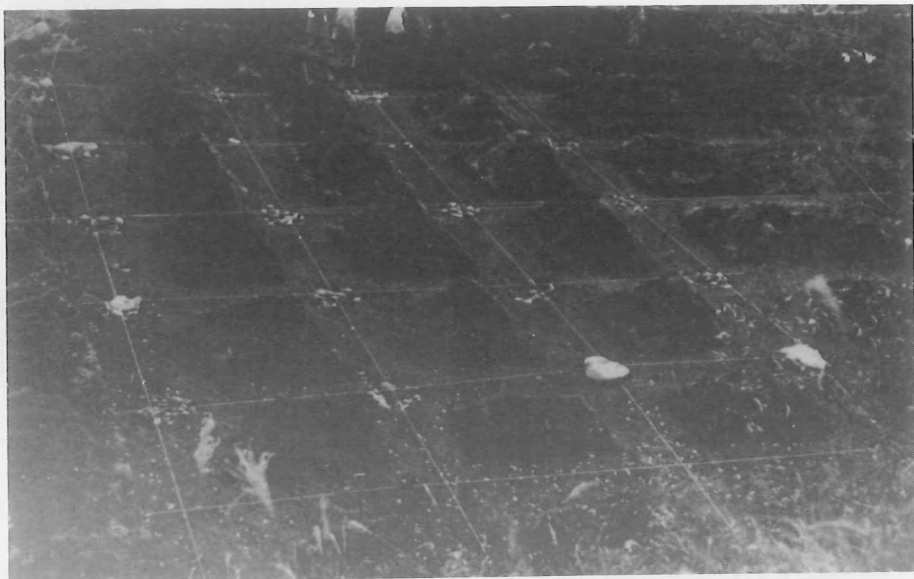
縄文時代の遺物



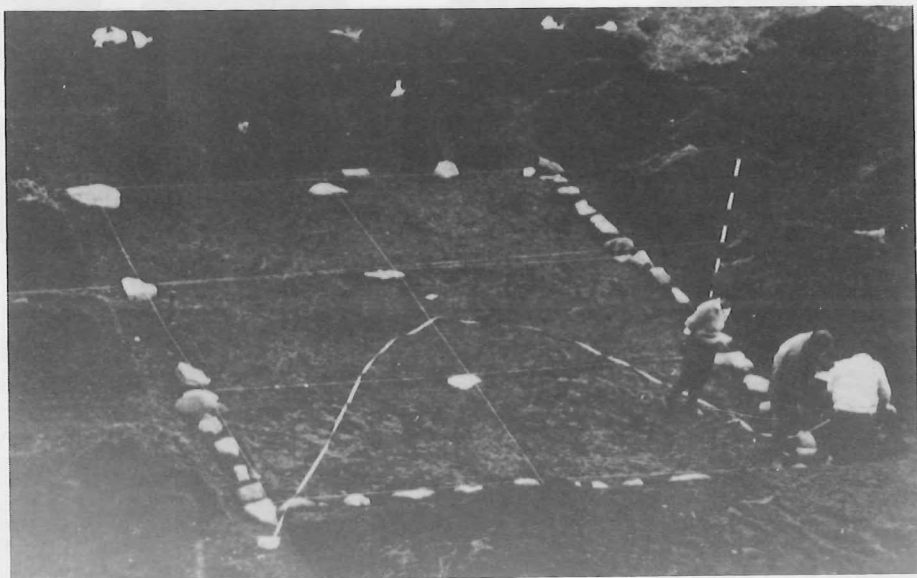
(1) 第1次調査時の様子



(2) 第1次調査のC建物礎石



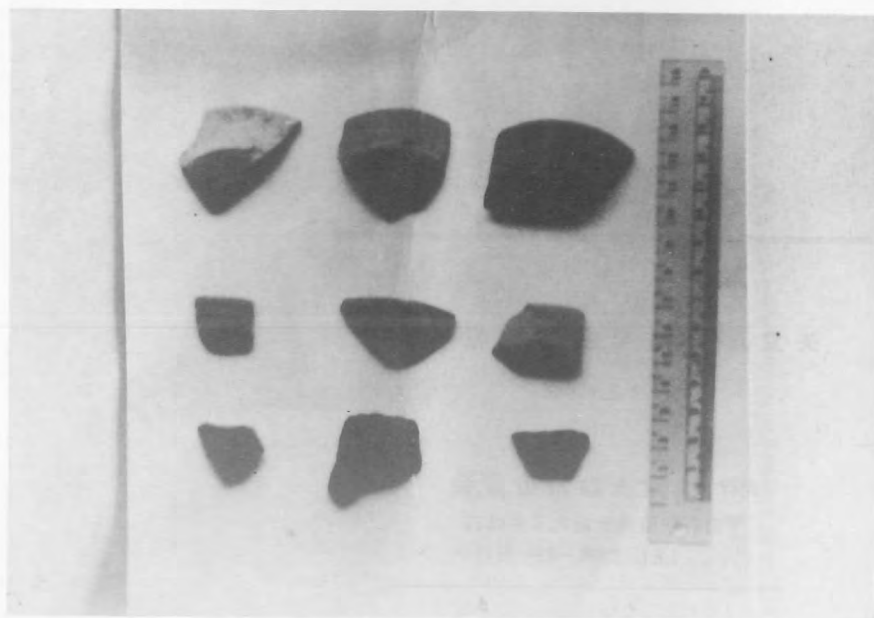
(1) 第1次調査時のD建物



(2) 第1次調査時のE建物



(1) 第1次調査時検出の柵木



(2) 第1次調査時出土のカワラケ

大 館 市

矢立廃寺跡発掘調査報告書

1987・3

発行 大館市教育委員会

〒017 秋田県大館市字中城20

TEL 0186-49-3111

印刷 秋田活版印刷株式会社

〒011 秋田市寺内字三千刈110

TEL 0188-63-8484